

---

# 異世界転生THE（駄）フラグ（仮題）

nakaya

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界転生THE（駄）フラグ（仮題）

### 【Nコード】

N5067Y

### 【作者名】

nakaya

### 【あらすじ】

俺、いつか異世界に転生するんだ……。

そんな夢を見ていた痛い男に、ゲーム中に転生する機会が訪れた。ただしメインのネカマカンストキャラではなく、モブ型倉庫キャラで！

だが異世界には自分が演じていたメインキャラの姿もあって……。どうしてこうなったんだかわかりません。

そのくらい後先考えてない転生もの、始まりますw

## そのいちー（前書き）

ありがちな異世界転生ものをやりたくなって、おかしい方向へ全力疾走中w

剣とか魔法とかある以上、流血もあるかと思うんでご注意を。

そのいちー

「なぜだあ！」

俺は両膝を屈し、両拳を激しく地面に叩きつけた。

「なんで倉庫キャラの時に！　こんなっ！？」

そう、今の俺は倉庫キャラだった。

どのゲームにも、一つのキャラが持てるアイテムには限界がある。そんなときに、アイテムを預けておくためだけに作るのが倉庫キャラだ。

まあ俺の場合は、ゲームに慣れるために作った最初のキャラだっただけなんだけど。

そんなだから、作りは超適当だ。

顔とか体とかは初期設定のまま。

メインキャラに持たせるかどうかと悩んだスキルを試すため、職業も転職ばかりで、パラメーターだって遊び丸出しで酷いもんだ。そんな感じだから、無駄スキルも多すぎる。

というか、だ。

「こんなこともあろうかと！　いや、こんなことがきつとあると信じて俺はっ！　うおおおっ、デییイイナアアアアア！」

魂からの号泣だった。

ちなみに恋人の名前じゃない。

俺のメインキャラ、ディーナちゃんのことだ。

きつとある。異世界転生、きつとあるよ！

そう信じてカンストしたディーナちゃん（１７才：女エルフ）は、

仲間内からエロフとかエロスとか言われるほど完璧な……ネカマキヤラだった！

くっそ！ マジくっそ！！

女性プレイヤーからも見破れないほど、完璧な演技を身につけた俺の苦勞をどうしてくれる！？

女ってのはな！ 男と体のつくりが違うんだよ！ だから立ってても、背筋の伸び方とか違うんだよ！ 足運びとか違うだよ！

ちよっとした仕草どころじゃないんだよ！？ 実生活にまで仕草が現れて、オカマと疑われた俺の苦勞はどこ行った！？

V R M M Oの弊害、ここにあり……ちなみに声は、変声ソフト使ってた。

「あー、マジウゼエ……」

俺、女の子になって、可愛い子とお近づきになるんだ……。

夢も希望も潰えました。

俺は右に林、左に平野、前後の地平の先に山、という場所を伸びる道の真ん中、立ち上がった。

「とりあえず街行くか……」

ふらふらと歩き出す。

ぽかーんとこつちを見ていた、商人の馬車つばいのプラス護衛団とそれを襲っていたらしい盗賊団の間を抜けて。

そのにー

「ちよっ、おまー!？」

盗賊の頭つぱいのが、はっとしたように声を出した。  
もちろん俺は……全力ダッシュだ。

「まちやがれ?」

なんで疑問系なんだよ? でも追ってくる。

馬鹿め、倉庫キャラつつつても、レベルが低いわけじゃねえし。  
メインキャラが装備できない、あるいは使わなくなった、もしくは問題が出るかも知れないアイテムを試すためにも、倉庫キャラつてのは存在している。

レアアイテムは、まだ受け渡しができるから良いんだが、エクステッド以上のものになると、基本的に受け渡しは不可だ。

そうになると、倉庫キャラ自身に取らせるしか無い。

そのため、レベルやスキルが低いつてわけじゃない。

(つつーか、ステータス見たいんだけど、この状況だとちよっとなー)

視界いっぱいウィンドウが開いたり、あるいはそれが他人から見えたりしたら最悪だ。

どう思われるかわからない。

でもまー、この足の速さだと、ステータスは改変されてないみたいだ。

その理由は景色の動きだ。

俺がやってたドラゴンレジェンドってゲームは、名前からもわか

るとおり……頑張りすぎたクソゲーだった。

その一つが、余りにもリアルすぎるグラフィックだ。重すぎて一般家庭のパソコンじゃ、エフェクト一つで秒間十フレームあるかなしかのカクカクになる。

そして無駄に凝った設定だ。

世界観とかもそうだけど、めんどくさいのがスキル群だ。

歩く、走る、飛ぶ、跳ねるとか、飛ぶってなんだよ？

飛べんのかよ、人？

斬る突く刺す……刺すと突くってどう違うんだ？

とにかく細分化がとんでもない。

その代わり、組み合わせ次第で恐ろしく面白いことができるようになる。

ネタゲーとしては……まあ、廃人になら面白いんじゃない？

たとえば外見だ。このゲームは、恐ろしいほどアバターの外装について凝ることができる。

もちろん基本パターンは用意されているし、そこから初めても良いんだけど、大抵の人間は、自分の理想のキャラを作りだそうと躍起になる。

ミリ単位で髪の毛の長さを決め、髪の毛の曲がり方を決め、髪型を決め、顔の大きさ、目の大きさ、鼻の大きさ、口の大きさ、それらの距離幅を決め……。

気がつくとそれだけで飽きてしまう恐ろしさだった。

しかし、そうやって乗り越えたのが俺のカンストキャラ、ディーナだったんだが……。

まあ、今は良い。とにかく、走るにもスキルが設定されている。

ヴァーチャルリアリティが売りなだけに、走る速さが違えば、当然景色の流れ方も違うわけだ。

そこから、このキャラのステータスが、ほぼ維持されていると想像できた、けど……。

「名前、ちゃんとしとけばよかったな」

フラグ。

それが今の俺の名前だった。ちなみに某ゲームの手榴弾っぽいやつのことじゃない。

お約束、フラグから付けた名前だった。



そのさんー

振り返る。

追ってきてるのは三人、向こうに残ってるのは二人。

そして護衛……あれ、冒険者とかなのかな？ は三人だ。

「なにぼけっとしてるんだ！」

叫んでやる。

「二人ぐらい、なんとかできるだろ！」

全員がはつとしたようだった。

我に返った盗賊よりも、護衛たちの反応の方がはやかっただ。

あっという間に二人を倒す。

残った盗賊たちは、俺を追うかどうかで迷いを見せていた。

立ち止まって、前後を振り向いているところに、護衛からの火の魔法と弓矢が当たった。

これであとは一人だけだ。

「お、覚えてるよ！？」

お約束の一言を残して、逃げようとする。

だが護衛がそれを許さなかった。

束縛系の魔法が飛んで、男の足を絡め取った。  
転がる音がした。

さて、どうするか？

あの商人のものっぽい馬車の中身は、姫様かご禁制の品か奴隷なのか。

あるいはただの商用品か。

どちらにせよ、これはありがちなフラグだろう。だから。

んじゃ！

そんな感じでシュタツと右腕を上げて挨拶し、俺は全力ダッシュで道を走った。

後ろから呼び止める声がしたけど、だが断る！

ここで安易なフラグは回収しない。

きつと後々、あなたはあの時の！　ってことになるはずだからだ。フラグは折るためにある。だけど折られたフラグはより太くなつて、俺の前に現れる！

きつとそうだと信じて、俺は明日に向かって道を走った。

そのしー

結論。

あれ、チュートリアルでした。

いくらか走ったところで、ぼーんって音がした。

チュートリアルをスキップしました。

そんなメッセージが聞こえた。

どゆこと！？

っと思ったところで思い出した。

あそこで護衛たちに庇われつつ戦い方を覚えて、一緒に旅をして細かなこと、世界観とか、お金についてとか、街での生活や野宿の仕方についてとか……。

そんな感じのことを学んでスタートする……っってことだった。

チュートリアルを受けたのなんて、昔過ぎて忘れてた。

なんだよ無駄に期待してたのに。

いや、諦めんなよ！ ゲームと全く同じように、イベントが起こつてるとは限らないじゃないか！

そんなわけで街に到着しました。

「でけー」

質感半端ねー。

石造りの壁に囲われた城塞都市    ギガンディアス。

力と戦の神、ディアス神にちなんで名前を付けられたという街だ。ざわざわと喧噪が激しい。

まだ外だというのに、市が立っていて、色々な人が行き交っている。

「都市の中には入れないか」

本物は違うなあと、壁を見上げながら人混みを歩く。  
ゲームはやはりポリゴンだ。本物の壁は触るとざらつき、砂化している部分がざらりと剥げる。

俺は壁にもたれかかり、ウィンドウを開いた。  
人がいないところで試したんだが、ゲームと同じく、可視設定があつたんで、人からは見えないように設定した。  
ステータスウィンドウに、コマンドウィンドウ……分離して必要なものをオブジェクト化し、見やすいように並べていく。  
全部視線と思考操作だ。

VRMMOでは、思考操作は必須技能だ。  
てか、ドラゴンレジェンドでは、使わざるを得ないスキルである。  
スキルが上がると、一定の動作が早くなる。  
その上で自分でモーションを作成する。

当然スキルが高ければ、複雑で高速なモーションを作成できる。  
魔法なども同じ感じた。だから、廃人であるほど、無理がなく細やかで、それでいて現実的には「ぶげらw」って感じのオリジナルコンボを持っている。

ただ……このシステム、モーションは作れても、それをコンボとしては登録できないのである。

なんで連続マクロが実装されてないんだよ、このクソゲーは。  
そついうわけで、一つ目のモーションを発動中に、二つ目のモーションを思考操作で実行する……ということができなければ、連続させたモーションをコンボとして成立させることができないのだ。

まあ、幼少の頃、本気で魔法を覚えようとしていた俺には簡単なことであつたがな。

## その二

どこかで読んだ小説に書いてあった。

魔法はイマジネーションによって、現実を騙す技法であると。

脳から出る波動が、現実という世界の量子に投影されて、世界がそれを本物だと思い込み、実際化してしまうのだという。

そのために、魔法使いは薬を使い、朗々と呪文を唱え、トランス状態へ陥っていく。

人数が多ければ多いほど成功するのも、集団催眠という形で、より大きな波動を生み出せるから……らしい。

とにかくだ、自分で現実、本物だと思えないようなことが、実際になることはないって話だ。

だから、自分を見失うくらい集中し、酔うんだろう。

で、だ。

魔法使いへの第一歩は、頭に白いキャンパスを生み出すことからはじまるのだそう。

太陽を見上げて、まぶたを閉じる。

するとまぶたの裏には焼き付きが残っている。

この焼き付きを、まぶたの裏に広げていく。

これが中々難しい。

毎日寝る前に電灯を見て、電気を消して、真っ暗な中、寝落ちするまで頑張った。

できるようになったら、焼き付きの色を自分で選ぶ。

どんな色でも、まぶたの裏を染められるようになるまで、やっていく。

次の段階は、妄想だ。

その白いキャンパスに、現実が騙されてくれるぐらいの、リアルな映像を投射する。

第三段階では、まぶたを開いたまま、リアル映像を実際に見ている景色に投影する。

ちゃんとした導師、導き手がいないと、この辺りで現実に見ているものと、空想とか妄想とかと、区別の付かなくなる奴が出るらしい……んだけど、俺はまあ、この辺りで諦めた。

ただ、思ってたんだ。

空想が現実と見まがうほどリアルだと、現実が騙されて空想を實際化してしまうというのなら……。

リアルすぎるゲームは、リアル化する可能性があるんじゃないかって。

それが、俺がこのドラゴンレジェンドを選んだ理由だった。

余りにもリアルな作りは、本当に第二の世界、異世界だと思わせしてくれるものだった。

そして俺の願いは叶った、と言えるのかも知れない。

……ディーナの件を除いてな！

そのろくー

まあいつまでもふてくされてたつてしょうがないんで、今は情報収集だ。

壁際には俺と同じように座り込んでいる者たちがいる。

ゲームでは露店を開いている連中（自動で商品の売り買いを行える機能を利用していた）だったけど、見る限りでは浮浪者らしい。街に入れてもらえない。だけど街からは離れられない……危険だからだ。

そんな狭間で、行き場がない連中つばい。

まあ、中には俺のように休んでいる者もいるので、彼らに間違われることはなかった。

（問題は、金だよな）

露店で買い物をしている人たちを眺めていて、まずいことに気がついた。

もちろん金はある。倉庫キャラの使い方の一つに、メインキャラのためのバックアップ品、薬品や食料の生産つていうのがあって、そのために材料や食材を、競売や露店にて買い付けしなくてはならなかった。

だから、そのための金を、かなり余計に持たせていたのだ。

だが、今はこの金が、問題だった。

俺は1ゴールドを取り出して、指で弾いて、くるくると滞空するのをじっと眺めた。

落ちてきたコインを掴み、手を開いて、指でつまみ、空にかざして、観察する。

綺麗すぎた。

上からは真円、横からは平行。

鑄造の関係なのか、やり取りされている硬貨は、どれもひん曲がっていたり、欠けていた。

歪んでいて当たり前。

ちなみにゴールドと言っても、純金でやり取りされているわけじゃない。

混ぜ物で、比重については、取り決めであるんだろう。

つまり、俺の綺麗すぎる硬貨は、偽物だと見なされる可能性が高かった。

「どうしたもんかな……」

持ち物売って、得たお金でどうにかするという考えはある。  
ただ、ここでも同じ問題が出て来るのだ。

「高品質すぎるとか」

露天商の回復薬を眺めて確認した。

キャラクターが作成できる最低品質でも上等な部類に入るだろう。  
まあこれはゲームでも同じだったから、驚くようなことでもない。  
店売りのアイテムを買うのは初心者くらいだ。

普通は競売所に登録されてるものか、露店やってるやつから買うもんだ。

あとは、効果の問題だ。

俺が持っているものが、俺以外のやつらに効くのかどうか？

ゲームでは、NPCに対して薬品は使えなかった。これは仕様の問題だったけど、効果そのものがないとなると、売った俺の責任問題になりかねない。

どこかで試せないかなと思ったときだった。

隣に座り込んだ親子の内の母親が、ずるずると横に倒れ伏した。



そのななー

ざわざわと騒がしくなる。

皆が徐々に距離を取る。

一度に言葉が聞き取れないので、不可視ウィンドウを開き、ログウィンドウを大きくする。

スクロールする文章は、もちろん周囲の会話である。

病気、疫病、戦争、憶測が流れていく。

子供が不安げに母親を揺すっている。

親子とも、フードを深く被って身を隠しているため、顔はわからないが、体つきから性別は判断できた。子供の方も女の子だ。

やべ？ フラグ？

回収しますか？ しませんか？

そんな声が聞こえた気がした俺は、しばし悩んで、接触してみることにした。

「おい、大丈夫か？」

子供が不安げに母親を庇った。

俺は無視して、母親の手を取った。

細っせえ……枯れ木の方がマシじゃないのか？

っていうかこの手、毛だらけで……この感触、肉球なんじゃ。

フードの奥から俺を見上げる子供の顔が見えた。

怯えていて、それでも唸りを上げて、母親を守ろうとしている。

目は大きく丸く、猫っぽい鼻に、鼻の下から唇までの部分が人間よりも少し大きく膨らんでいて、顔全体が毛に覆われている。

獣人系か。きっと耳とか怖くて伏せてるな、これ。

犬系か猫系か、はつきりとはしないが、俺が持っている手は猫っぽい特徴が見える手だった。

指は太め、短めで、甲の側は毛深く、鋭く伸びる爪がある。  
指の腹は少し厚めで、肉球のなごりっぽい感じでぷにってる。  
フラグk t k r、親子丼？

いや実は、逃亡獣人で、獣人と人間の戦争に巻き込まれる流れと  
か……ねーな。

だったら人族が多い街なんかに来てるはずがない。  
母親を抱くように支えてやる。

「おい、聞こえるか？ 聞こえてたら、指で俺の手を掻け。一回だ」

俺の手のひらの内で、指がくつと曲がった。

まだ意識はあるようだ。

「助けて欲しいか？ 助けて欲しかったら一回だ」

また曲がった。

「俺は街に入りたい。お前は病気が治ったら、入れてもらえるか？」

よし、曲がった。

「んじゃ、最後だ。俺も一緒に連れて入ってくれるか？」

契約成立つと。

懐から取り出すポーション（無印）、まずはこいつだ。  
フードを外してやる。

周りの目は気にしないでおく。

猫っぽくもあり、人間っぽくもある顔つきだった。

目はまぶたが閉じててわからないけど、この耳……。

まさかの虎系？

「あー……」

だから顔を隠していたのかと納得した。

希少種だ。

ちなみにドラゴンレジェンドでは、獣人系のアバターは用意されていない。

男性女性以上に、骨格や体型が違いすぎて、システムの補正が追いつかないからだ。

そのくせ、NPCはリアルすぎる動きを見せるんだから、無駄に凝ってる。

ドラゴンレジェンドにおける彼らの立ち位置は、主に戦闘補助NPCだ。

契約方法は様々で、イベントで仲間になったり、奴隷として購入したり。だがその中でも、虎種との契約は、クリア条件がかなり厳しいものだった。

端的に、プレイヤーが操作するアバターより、よほど速く動き、力も強いからだ。

高レベルプレイヤーでないと、自分自身が要らない子状態になってしまうため、彼らより強くないと、契約できないように調整されている。

（つてことは、無印ポーションじゃ追いつかないな……）

とりあえず、飲ませようとするが、猫っばい口は受け付けてくれない。

困った……と、思って身を引くと、子虎が不安げに俺を見上げていた。

……わーったよ。

俺はくつと小瓶を煽ると、思い切って口を合わせた。

そのはちー

……もし、この虎母が俺のモンになったら、俺、ぜったい歯磨きさせるんだ。

臭かったです。

両手を突いてげーと吐いた。

歯槽膿漏なんてもんじゃねえ、未開文明の洗礼を味わったぜ。

あと舌がめっちゃざらついてました。

母親は元気になりました。

今は万能薬を飲んでます。

ポーシヨンで体力を戻して、万能薬で毒と麻痺と病気を癒して、最後にハイポーシヨンでとどめを刺す。

結果、すっげー肉付きの良い雌虎になりました。

なにこれ？

効き過ぎ怖い。

てか若いなかーちゃん。

見た目俺より若くねーか？

「元気になって何より」

「はい」

警戒しているのか、子虎を抱きしめてこっちを見ている。

「動けるようになってすぐで悪いけど、目立ってるから、さっさと中に入りたいんだ」

そついうわけだと、強引に腕を取り、門へと向かうため立ち上がらせた。

門まで行くと、母虎は門番に、街にいる知り合いを訪ねてきたと、メダルのようなものを見せた。

それを見た門番が、そこで待てと、番所を指定する。

門番が仲間を呼んで、どこかへやった。

焦っている様子から、かなりの大物を呼びに行ったとわかる。

「んじゃ、俺はここで」

「え？」

「日が暮れるまで時間がないからな、宿とか探さない」と

そうですかと、母虎は微妙な顔をした。

「どうした？」

「お礼も……」

「いや、街に入るのを手伝ってくれたろ？」

「でも」

「そういう契約だからな、ま、同じ街にいるんだし、そんなに宿があるわけでもないんだし、何かあるんなら探してくれ」

じゃあなと、言う。

一人門番が減ったために、検問の手が足りなくなって、忙しくなっているようだ。

こちらを監視している隙がなくなっているのを見て、俺はこっそりと、一人で番所を後にした。

さあて、定番の行動に出てみるか。

そのくー

とりあえずギルドへ向かう。

街のつくりは俺が知っているものと対して違わなかった。  
よって速攻で見つかったんだが。

「こんにちはフラグさん。今日は何のご用でしょうか？」

あつれえ？

「えと、受けてる依頼の確認に？」

「？　そうですか、今受けているのは、護衛の依頼ですね」

おっやあ？

「ファーガスまで……どうしました？」

「イイエ、ナンデモナイデス」

ちよつと待てちよつと待て、どういうことだ？

すでに登録されていて、しかも依頼まで受けているだど？

思い出したのは、置き去りにしてきた商隊のことだった。

まっじーなおい。

もし護衛の依頼つてのがあれのことなら。

俺、依頼放棄つてことになってるんじゃない？

いやーな汗をたんまりとかいて立ち尽くしていると、バンツと派  
手な音がした。

振り向くと、ギルド館出入り口のドアが、力任せに開かれていた。

「ふうら〜ぐ〜……」

地の底からの声ってのは、きつとこんな声だろう。

俺は……固まってしまっていた。

恐ろしかったからじゃない。

「でい、ディーナ」

ギルド館の扉を押し開いたまま両腕を突っ張っているのは、間違  
いなく……。

「あんたなに依頼放棄なんてしてんのよ！」

手を離し、一気に距離を詰めてきた。

ドアが勝手に閉まっていく。

俺は、胸ぐらをつかまれて、頭一つ低い位置から、おっそろしい  
形相で睨み上げられた。

「なんで!?!」

「パーティー解除してないでしょうが! 移動先を追ってきたのよ  
!」

パーティー設定見てなかったし!

パーティーを組んでいると、メンバーが今、どここのフィールドに  
いるのかは表示されている。

ディーナの名前があったのか!?

「荷物番のくせに逃げ出すなんて! どういうつもりよ!」



荷物番！？

「それも強盗を退治して、依頼を果たしてからだなんて、やり損じやない！」

ゴツとスネを蹴られた。

「~~~~！！！」

カンストスキルでスネ蹴りとか！

俺は足を抱えてうずくまった。

ちくしようと思って涙目上げる。

そして俺は固まってしまった。

やべー、なにこの子、ちょーかわいい！

小さな顔に青い瞳と桜色の唇。

白いブレストアーマーを、ほどよい胸が押し上げていた。

背中には赤いマント。その上を金色の髪が腰まで流れて……。

短いスカートに、長いブーツ。間に真っ白な肌。

つまり真正面には絶対領域が！？

……抱きつきてえ。

……すりすりしてえ。

……枕にしてえ。

いや抱きついて枕にしてすりすりしてえ。

「俺、いつかこの太ももを、抱き枕にしちゃうんだ」

ゴツと、そんな俺の顎をスキルレベル255の膝蹴りが強襲した。

そのとー

「まだガクガクする」

「うつさい！ 黙れバカ、キモイ！」

なんだよおっと、前を歩くつむじを見下ろす。

はい、だいぶ正気に戻りました。

どこに向かっているのかというと、俺たちプレイヤーに与えられている宿場町である。

長屋のような場所だ。ワンプレイヤーに一戸の宿。ゲームでは、宿場町へのエリア切り替えで、いきなり自分の部屋となっていたんだが、ここは現実、ちゃんと歩いて向かうことになるらしい。

ちらほらと空き家が見える。満杯になったらどうすんのかな。と、ディーナが立ち止まった。

（ここが俺たちの家か）

見上げると言うほど大きくもない。

ほぼ真四角の一軒家だ。隣との間は体を捻れば通れるほどの隙間があるだけ。

ブロックをくり抜いて作ったみたいなの？

というか、窓も穴が開いてるだけ。

入り口もだ。

（空き巣入り放題じゃん？）

と思って入り口をくぐろうとすると、一瞬魔法陣が浮かび上がった。

なんの抵抗もなく、すり抜けることができたけど。

（防犯チェックってわけか）

ちなみに俺たちは、同じ家で暮らしてる……らしい。

ゲームでは、別アカウントで倉庫キャラを作り、恋人設定にしてあった。

（げ、マジかよ）

そうすることで、ハウスの保管量が、2キャラ分が増えるからだ。そうしないと、あっちとこっちの荷物をやり取りするために、キャラを変えてログインを繰り返すことになる。

夫婦とか兄妹設定とかいろいろあったけど……今俺は猛烈に悩んでいた。

ばふっと、奥にある部屋のベッドに、ディーナが腰掛けた。かちやかちやと鎧を外し出す。

俺の前だというのに無防備で……。

（俺、こいつを好きにしちゃって良いの？）

喜んでるわけじゃない。

むしろ逆だ。

（ないわー……）

客観的に見て思った。

自分で演じてたくせにつて話だけど、客観的に見て見ると、こんな子、現実にいるか！？　って話だった。

どう見たってキャラ作ってるよ、なんか被ってるよ。

仕草の一つ一つが媚びててキモイよ。  
しかもそれやってたのが自分だったわけでして、やべ、死にたくなってきた。

「くぁぁぁぁぁ！」

全身をかきむしって転がってしまった。  
ディーナがびくつと怯えて身を引くのが見えた。

（俺、こんなだったの！？　こんなこと、男相手にやってたの！？）  
いくら最終目的が女の子とのキャッキャウフフだったとしてもだ。  
ネカマスキルを上げるための特訓だったとしてもだ！？  
なにこれ！？

確かにさっ、騙されてるー！

（＊。＊）プププー！

とかやってたけどさー！

これ、人に知られたら、俺の方がヤバくね！？  
俺の黒歴史がまた一ページ。

「な、なんなの！？」

「なんでもないです、お嬢様」

「お嬢様！？」

頭打った！？　って言わんばかりの態度ですな。  
わかってます。自分でもおかしくなってます。

「それで、依頼の方はどうなったんだ？」

俺が大きいため息を吐きながら聞くと、ディーナは……。

「ちゃんとファーストまで送り届けました！」

「そっか、そりゃよかった」

俺一人が失敗したってことになるんだよな。

向こうまで行って、テレポート系の魔法で戻って来たって感じがな。

そんなことを考えていると……。

「なんであんたは」

「え？」

「できるくせに、途中でやめちゃうのよ」

「……………」

「……ばーか」

つかれた、眠いと、ディーナは布団に倒れた。

大の字になって眠ろうとする。

「なんか人の名前叫んだかと思ったら、逃げてっちゃうしさあ」

なんだこいつ？

赤くなってる？

「靴脱げよ」

「外して〜〜〜」

「よしわかった!」

「え!?!」

小さな体を抱え込むように覆い被さって、膝裏に腕を入れて持ち上げパンツまる見えで逆さにしてやったら……。

ゴツ!

肘打ち、股間に食らいました。

だから、スキル255、カンスト攻撃は、突っ込みとしてはきびしいです……ガクッ。

ステータスが君を決めるんじゃない、君がステータスを割り振るんだ！

お嬢様はギルドへクエストに。

荷物番は街に買い物へ出かけました。

ということで街を散策中であります。

「むーん」

街並は知っているものと変わらない。ゲームと同じ視点、同じ速度で動いているからなおさらだ。

売り子や行き交う人の群れ、波が、見知ったモブとは違うくらいか。

冒険者つばいのが何人が居るけど、俺みたいな転生者もいるんだろっか？

街の中央、噴水広場まで来て、その隅っこにしゃがみ込む。

ここは別名、シャウト広場だ。

一緒にクエストを受けませんかー？

現在ハイパーポジション200G！残り10個！

そんな声がここでも聞こえる。

「思ってたのと違うんだよなあ……」

もちろん転生の話である。

生まれ変わるとか、落とされるとか、そういう展開だと思ってた。けど実際は、既に存在していた、フラグって人間に重なったツポイ。

そのくせ、フラグとしての記憶がない。

フラグどこいった？

(やべー……ディーナに気付かれたら説明できねー……)

どうなんだ？

ドラゴンレジェンドに似た平行世界があつて、ゲームのドラゴンレジェンドが余りにもそっくりで、だから世界が、同じものと混同しちゃった、とか？

「レベル的には文句ないんだけどなあ」

ぎゅっぎゅっと、自分の手を見つめ、握ってみる。

ドラゴンレジェンドには、職業という概念がない。

スキルが全てのゲームだからだ。

別に、鍛冶屋が商人として、自分で作ったものを売っても良いじゃん？

魔法屋が、魔法の武器作って売ってたって、かまわないじゃん？  
つてなもんだ。

ただ、特定のスキルを上げて、戦士だとか、魔法使いだとか、名乗るのは自由だ。

自分を紹介するための職種欄が、ステータスの設定項目に存在している。

そこになにを書くかは自由だ。

はい、ちょっとへこんでます。

昨日、ディーナに無理矢理、荷物番つてさせられました。

んでもって、ディーナは精霊騎士となっている。



偏り方は、精霊魔法に七割、騎士に三割って感じだな。

ついでにレベルについて説明しておこう。

カンストカンストって言うてるけど、カンストについては二つある。

一つはスキル、もう一つがレベルだ。

スキルは使えば使うだけ上がっていく。

ディーナのように、精霊魔法が主体なら、自然とカンストしてしまっ。

……剣技系が高いのはともかく、叩くとか殴るとか蹴るとか、突っ込み系が剣技を先回って、カンストしてるってのはどうなのよ。

まあ、ともかくだ、スキルは使ってさえいれば数値は上がる。

技能職や生産職の連中だと、戦闘系よりそっちに偏る。

最終的には、みんな255になるわけだけど。

だったら、最終的には、プレイヤー全員が、代わり映えのしない強さになるじゃないか、というところじゃない。

足かせがある、それがレベルだ。

レベルは初期上限が70となっている。

けれど、レベルキャップの解放を受けることによって、最終的には150が上限値となる。

解放条件は、クエストだ。

そしてレベルは、上がる度に、ステータスやスキルに加えられる、ボーナスポイントを与えられる。

つまり、スキルを255で止めずに、上にまで持って行けるし、ステータスの影響によって、スキル値が同じであっても、効果や威力が変わってくる。という現象が起こるのだ。

ステータスはHP・MP・ST/STR・DEX・VIT・AG  
I・INT・MND・CHR・LUCKとなっている。

普通のゲームと扱いが違うのが、MPとSTだ。

精神力とスタミナ。

魔法はマナとかを消費するんじゃなく、詠唱のために精神力を消費し、精霊を呼び出すために消耗する、という理屈だ。

そしてスタミナ。

長時間連続して行動、あるいは通常以上の運動を行っていると減っていく。

少なくなるにつれて、体が重くなっていく。

VRMMOでは、ただでさえ思考とアバターの動きがシンクロしないというのに、この足かせはかなりきつい。

俺はこいつを上げるために、VITにやたらとポイントを振っていた。

だって！ スタミナですよ奥さん！？ 一晚ひゃっはーですよ！？  
すみません、取り乱しました。

俺、いつか魔法使いになる前に、女の子啼かせるんだ。

……はっ！？ 俺、現状で魔法使えるわっ、やべ！？

んまあ、とにかく、システムの話である。

このゲームは、自由にモーションを作れるけども、やはり用意されている技や魔法が存在している。

しかし、最上級のものを使えるキャラは珍しい。

それは平行職ではなく、戦士や魔法使いと言った、特化型の育て方をしていなくてはいけないからだ。

ディーナは精霊魔法の最上級、最大魔法を使えない。

それは冒険者のエルフとして育てたからだ。

本物の……NPCのエルフは、精霊魔法使いとしては強大な魔法を使い、恐ろしい存在である。

しかし、それに特化していて、体力がない。

装甲も紙である。

そのくらい、ボーナスポイントの極振りを行わないと、極大魔法は使えないのだ。

しかしそれでは、ゲームをするには辛すぎる。

というわけで、ディーナの場合、腕力（STR）やら体力（VIT）にも、ボーナスを振り分けて育ててある。

そのため、格下（レベル的な意味で）の相手なら、騎士としても通用する作りになっている。

問題は俺、フラグだ。

ステータス画面を開いてため息を吐く。

「適当すぎんだろ」

Lv70

HUMAN

HPmax 1200

MPmax 108

STmax 1024

STR 60

DEX 73

VIT 140

AGI 100

INT 41

MND 39

CHR 75

LUCK 102

「レベルキャップの解放クエ、受けるかなあ」

幸い、上限までにはかなり余裕がある。

「それでも、勇者にはほど遠いなあ……」

それも悩みの種だった。

着地点が見えないので裏設定を作ってみた。

このゲームには、勇者として、というありがちな話は定められていない。

ドラゴンレジェンドという名前の通り、ドラゴンに関する伝承、伝説、神話を追って、世界を旅する。そういうゲームだ。

まあ、下級ドラゴン、中級、上級、そして神レベルのドラゴンと相まみえる……という流れもあるが、かわらなくても十分遊べる。そういうゲームになっているのだ。

別に世界の破滅が迫ってるわけでもないから、適当に過ごしていてもかまわない。

だけど、普通にしているも、日常を繰り返すだけになってしまう。

大半が、ここでつまんねーと投げてしまう。

しかし、冒険とは、非日常にこそあるもんだ。

つまり、冒険を堪能したければ、非日常を選ばなければならない。だから、まずは、旅立たなければならないのだ。

街とか、ギルドとか、枠組みとかから、卒業しなければいけないんだが……。

この辺りも、クソゲーと呼ばれたゆえんだろう。

日本人プレイヤーは、基本的に、敷かれているルールを好む傾向がある。

無軌道に、たとえばギルドに加入せず、迷宮を荒らすとか。

配達クエストを妨害し、アイテムを奪うような、盗賊になるだと

か。

帰ってこられるかどうかかわからない、異境の地へ旅立つたとか。そのために、仲間を募ったり、徒党を組んだり、組織を作ったりとか。

そういうことをしない、できない、発想がない。

だから、敷居が高すぎる、ということになっていた。

だけど、それができた奴らには、面白すぎるゲームとなったのだ。

攻略本通りのことしかできない連中には、とっつきにくいだけのゲームになってしまったんだが……。

だけど、そんな中にも、勇者、英雄と呼ばれる連中が生まれ出た。大規模クエストなどで、勇気ある振る舞いを行い、名を売ったりとか。

女風呂に突撃して牢屋行きになったりとか。

俺のことだけどw

勇者とは、役職のことではない。

勇者とは、勇気ある者のことを言うのだ。

だから、勇者と呼ばれたければ、勇者っぽく振る舞って頑張つてねと言う、なにその投げっぱなし？　って感じだったりするんだけど……。

うん、日本メインのゲームで、それは無茶だったね。

だって、ヒーローっぽくとか、なにマジになってんの？　って話じゃん？

んで、このゲーム、基本的に、廃人とかオタク向けじゃん？  
勇者とか、斜め方向に行くに決まってるじゃんねーかw

あ、でも、魔王さん居ます。

ただ実装前で、設定だけだったけどw

なんか光と闇のパワーバランスが、うんとかとか、やたら凝った設定になってた。

光と闇は、裏と表、善と悪と同じ、等質のものであるらしい。それがどちらか一方に染まるとき、世界は滅ぶとかそんな感じで。

世界に正義の力が溢れば、光の比率が大きくなり、世界が闇で包まれば、闇の比率が大きくなる。

神様が信者を求める理由だそう。

しかし、だからと言って、どちらの神様も、直接的には戦えないし、世界の動きにも介入できない。

なぜなら、光と闇は、質が違うだけで、同じものであるからだ。

つまり、光と闇が戦えば、ただの削り合いになってしまう。

そうなれば、残るのは、その時に質量の比率で勝っていた側の神となる。

それも、削り合った末に残った、削りかすだけの存在としてだ。

ならば、どうするかと言うと、光の場合、勇者、英雄に、期待するしかないという。

そう呼ばれるようになる者たちが、闇の勢力を押し戻し、光と闇の均衡を取り戻すことを期待するのだ。

勇者召喚ですね、わかります。

魔王招来も似たようなもんらしい。

この辺りが、大規模クエストの、裏設定となっている。  
闇が溢れた、光よ、希望を取り戻せ！ ってなもんだ。  
逆に闇が払拭されすぎると、運営から調整という名の追加クエストがプレゼントされますw

「ディーナが居ない間に、レベル上げつつかな……」

ディーナのレベルは150だが、カンスト組でパーティを組まないとかリアできないクエストも、多々存在している。

今は、彼女が所属しているギルドメンバーと出張中だ。  
遠出になるので、時間がかかる。だからしばらくは一人で行動できる。

「まあ、考える時間は、たんまりとあるんだけど」

だめだ、やっぱり動けない。  
俺は浮かしかけた腰を落とした。

クエスト……戦いに行きたくないのは、不安要素があったからだ。  
これが転生なのか、デスゲームなのか、それがわからなくて困っていた。

転生なら、定期イベントやクエストが、知っているとおりとは限らない。

なにが起こるかかわからないというのは、案外怖いものだった。  
だが、そうになると、チュートリアルスキップのアナウンスが、なんだったのかという話になる。



なら、俺は、ゲームの世界に囚われて、デスゲームに参加させられているんだろうか？

しかし、それなら、ディーナの存在が不可解だ。

誰かが、俺の別アカウトで、アクセスしている？

あるいは、デスゲームを仕掛けた奴が？

だがなんのために？ 俺なんかをハメてなんの得があるっていうんだ？

愉快犯の可能性もあるが、こっちもやはり、なんの確証もない話だった。

「フラグっていう人間が、ちゃんと生まれて存在してたんなら、あのタイミングでチュートリアルって、おかしいよな」

カンストキャラであるディーナの倉庫として、初期上限であるレベル70まで成長している以上、あれが初クエスト、というのは不自然で、チュートリアルを受けるような、素人であるはずがないからだ。

「つまり、あれは、俺に対するアナウンスだったはずなんだよな」

どういうことなんだかなあと、首を捻っていると、また、あの、ぼーんって音が聞こえてきた。

『依頼：商人の護衛 結果：失敗 違約金の支払いが行われなかったため、強制奉仕活動への召喚を行います』

「へ？」

気がつけば、がっちがちに鎧を着込んだ兵士さんたちに取り囲ま

れてました。

「へー！ー！？」

…ひどいゲームだな、これ。

クエスト失敗に伴うペナルティ。

これがあるのは、気軽にあれもこれもと受けるだけ受けて、めんどくさいと放り出す奴がいるからだ。

しかしこのゲームは、オンラインRPGである。

討伐系の依頼などは、一定数以上のプレイヤーが受けられないように調整されている。

そうでないと、対象エリアでの、モンスターの沸きが足りなくなるからだ。

だがこの枠を、受けるだけ……という連中に埋められてしまうと、つまらない話になってしまう。

そこで、ペナルティがもうけられている、というわけだ。

必然的に、ペナルティは、護衛、討伐、採取、探索、調査に、尾行などの、サブクエストに限られて設定されている。

メインクエストは、失敗して当たり前の難しさだから……くり返しチャレンジできないと、攻略法も見つけられんし。

んでもって。

「いやーだー！」

俺が投げたのはチュートリアルレベルのクエストだって話だ。

だって、チュートリアルをスキップしただけじゃん！

なんでペナルティがあるんだよ！？

「地下送りだけは勘弁してくれえ！」

と、王城裏手で、兵士に両脇を抱えられてごねていた。

この街は、魔族との大戦を目的として作られた城塞都市である。その大戦は既に過去のものであるが、かなり派手な攻防があったようで、空に地上に地下にと、魔族の侵攻は苛烈を究めた……という事になっている。

このゲーム、細部まで凝ってるのは良いけど、全部文章ですませてるのがなあ……。

んで、地下の話。

虫型の魔物が地面を掘って都市の内部にまで侵攻したらしい。その時に掘られた穴が今も健在で、地下迷宮の様相を呈している上、どこかに繋がっているのか、魔物や、魔物とは言いがたい危険な虫などが沸いている。

でも、そこはそれだけの場所なんだ。

お宝なんてものは無く、ただただ駆除して回るだけなんだけど。

出るんだよ。

来るんだよ。

飛ぶんだよ。

カサカサと。

ヌラヌラと。

テラテラと。

それは人類の天敵だ。

そしておそらくは真の魔王。

その姿は闇よりも暗い黒。

人類史が始まって以来、終わることなく果てしない戦いを演じてきた、最強最悪、最初にして最後の敵。

硬くて光ってて臭くて奇妙な声をあげるせーぶつ。

その名を呼ぶのもおぞましく、誰もが仮称でその名を言う。それすなわち、『G』。

正式名ジャイアントコックローチ。

体長一メートル前後。

知ってるか？ あいつら、腹の面って異常にキモイんだぜ？

それを完全再現した開発チームは死ぬべきだと思う。

せめて病院に入ってくれ。

んでもって、こいつら、時々は地上にも現れるため、最重要討伐対象になっている。

あほかと。

殺虫剤で殲滅しろよと。

それができないのは、こいつらが地下での掃除屋としての役割があるからだ。

食物連鎖など存在しない地下道迷宮だけに、そこで出る魔物や虫や小動物なんかの死骸を駆除する、なにかしらの動植物は、根絶させるわけにはいかないらしい。

というわけで、個体数調整のための討伐が、罰ゲームとして課せられていた。

設定的には。

本当のところは、低レベルプレイヤーのレベル底上げのためだ。依頼を失敗>お前、レベルを上げて出直してこいよ。

というわけで、レベルが上がるまでそこからは出してもらえないんだが……。

俺、レベル70なんです。

限界突破クエスト受けてないんですよー！

いやああああ！

もちろん救済措置はあるんだけど、100匹倒すコースなんです。

やめてえええ！

しかも、現在、リアル化してるんです。  
倒したって証拠も、取らなきゃならないんです。

ひひひひひ！

つまり魔法なんかで、跡形もなくつてのはだめで、弓なんかの飛び道具じゃ、刺激するだけだろうし、暴れられたり、ましてや、飛んでこられたりしたら……。

ゾゾゾゾゾ！

つまり、方法としては、メイスなんかで。  
ぐちゃっと。

「お願い許して、なんでもしますから、神様助けて神様！」

「そのお願い、かなえましょうか？」

神様！　って思っ振振り向いたら、悪魔がいました。

主人公がうだうだしてて話が進まないのて相方付けてみた。(前書き)

設定の追加に伴い「そのいち」をちょいいじりました。

(・・・) すんません・・・

主人公がうだうだしてて話が進まないので相方付けてみた。

レイシア・アルタイユ。

良い感じに熟した三十才のお姉さんだ。

身長は170センチちょい。

胸もお尻もあって、着ているものはボンテージ系……らしい。

らしい、と、よくわからんのは、つねに真っ黒なローブで体を隠しているからだ。

赤く長い髪は跳ねまくっているライオンヘアーで、感情が高ぶるとぶわっと大きく広がるといふ。

その時、彼女はローブをはだけ、ボンテージ的な格好で鞭を振り上げる……という、妄想が、攻略サイトの掲示板に書き込まれていたが、ほんのところは魔法使いだと知っている。

それと同時に……。

彼女はプレイヤーである。

「ねえさんっ、ねえさんじゃないか！　生きて……」

「なにその流れ」

「いやなんとなく」

「ところであんた、タダオ？」

「やめてっ！　その名前で呼ぶのやめて！」



「ところで誰がねえさんか」

「ですよねえ、歳で言ったらお母さん」

攻撃魔法が飛んできました。

「やめて！ 突っ込みでギガフレイムとかやめて！」

「誰が年増か！」

「嫌なら、なんでそんな年齢設定にしたんだよ！？」

「そういう年頃だったのよ！」

ちなみに中の人、リアル幼女です。

それも一桁のヒキニート。

複雑なご家庭に育ってます。

「まさかこんなことになるなんて……」

「十代と二十代消失、おめでとう」

「やっぱ地下行く？」

「すみませんっした！」

ジャンピング土下座……っっていうか、このモーション、デフォで搭載されてました。このゲームの開発陣、あなどれん……。

「っっていうか、やっぱいたのか、俺以外にも」

「まあね」

あ、そだ。

「なあ、俺よりも先にこっちに来てたのか？」

「そっちは、何日？」

「……12月24日」

「おんなじ」

はあつとふたりでため息こぼした。

せつねー。

いや毎年ね、みんなね、この日の晩は、どこかの頂とか中心とかで、叫んでるだけなんですよ。

魂からの慟哭を。

しーねーばーいーのに……リア充なんて！

「チート転生とか。神様からのプレゼントだったりしてね」

「……やめてください、ねえさん。みんなにとってご褒美です」

これで大体、このゲームにはまってる連中のことがわかったと思います。

さて。

「ってことは、同じタイミングで連れ込まれたとか飛ばされた可能性が高いのか」

「ばらばらに、条件を満たしてって、感じじゃないみたいね」

ねえさんは、俺以外にも見つけてるみたいだな。  
すでに話も聞いてるっぽいし。

ちなみに、俺にこのゲームを覚えてくれたのは、ねえさんである。  
お古のパソコンと、これまた型遅れのVRMMO対応システム一式とでだ。

ちなみに俺は、家庭教師という名前の、家政夫だった。  
単に、近所に住むお兄ちゃんとも言っう。

これ以上は、暗い話になるから、かんべんな！

んでもって、まあ、普通にMMORPGをやってた俺は、まずは  
と慣れるためのキャラを作った。

それがフラグだ。

後の倉庫キャラ。

ん？

「まさか、一番最初に作ったキャラに、俺、重なってるのか？」

「かもしれない。あたしも、グアールでインしてたのに、レイシアだしね」

グアールってのは、彼女のサブキャラである。  
レイシアに釣り合う、イカしたナイスガイだ。

……うん、この言い方で、もうネタキャラだってわかりますよね。  
ちなみに姉弟設定だ。

「それでさ」

「ん？」

「気付かないで行っちゃったみたいだけど、あたし、あの時いたの  
よね」

「あの時？」

「チュートリアル」

また見逃してた！？

「んでもって、あんた、叫んだでしょ？　なんでディーナじゃない  
んだって」

それで気付いたってことか。

異世界転生してーとか言って、こいつの前で作ったキャラだから  
なディーナは。

ディーナの中の人<sup>フリゲ</sup>が俺だ<sup>フリゲ</sup>って知ってる、唯一の人間だ。

「そういや、あん時、ディーナとレイシアと、後一人いませんでしたっけ？」

「もつといたよ？　けど、パニックったところをやられちゃった」

あー……。

「死んだ？」

「死んだ」

やべ、デスゲームかよ、これ。

こうなると、レベル70ってのはやばいな、チートってほど上ってわけじゃないし。

ん？

「ねえさん」

「なに？」

「どうやって強制イベントに割り込んだんだ？」

強制イベント？ と小首をかしげられた。  
嫌な笑みを貼り付けながらだった。

「なんのイベント？」

「なんのって、クエスト失敗の」

「クエスト？ 護衛任務の？ ちゃんと成功させたよ？」

「……あれ？ そっぴや、ディーナもそう言ってたっけ」

「うん、でも」

にんまりと。

やべっ！

「逃げるな」

すっころばされた。

「無詠唱で捕縛呪文とかかけないで！」

「思い出した？」

レイシアは俺の前にしゃがみ込むと、両膝の上に肘をついて、両手で顎を受けてにたにたと笑った。

「PTでクエストを受けた場合、敵前逃亡やら回線落ちで逃げたバカに対しては、リーダーが任意の懲罰クエストを強制できる。初期設定がメンバーへの違約金。次点が地下送り。でもそれじゃあ面白くないから、あたしからクエストプレゼントでもしようかなって……」

俺は、話からの恐怖ではない何かに、固まっていた。

「……どこ見てるの？」

「生えてる、だと!？」

いやほら。

レイシアの着てるローブって、エクステッドより上のユニークアイテムなんですよ。

詳細は知らない、教えてくんないんだもん。

取得条件すら不明のそれは、レイシア以外に持っているキャラを見たことがない。

レア度半端ないッス。

その性能は、俺が観察した限りでも、特定以下のダメージについては、無効にしているというものがある。

自分のレベル以下の敵の攻撃が、単純になにかの計算式ではじき出された値以下なら0になるのか、そこまではわからなかったが。PT中に、彼女のHPの変動を観察していて、わかったことだ。ともあれ、そういう便利なものなので、彼女はそれ以外を身につけていない。

それ以外を身につけていないのだ！

大事なことなので二度言いました！

良くいるだろ！？ 装備付けるのめんどくさくって、裸って呼ばれる無装備状態で移動してる奴！

彼女も、ローブ以外付けてないんです。っていうか……。

ゲームじゃなくなったんで、パンツも脱げる。

いつもの調子で、ローブだけ羽織ってきたな、こいつ。

んでもって、俺のしょうめんに……。

俺はゆっくりと……鼻血を垂らしながら上向いた。  
にっこりと彼女は笑ってた。俺たちはほほえみ合った。

「言い残すことは？」

「ありがとうございます」

とりあえず、最後の言葉はしゃべらせてもらえた俺だった。



フラグ建築中。しばらくおまちください。くさいっ!?(前書き)

投稿しようとしたらブルースクリーン食らいました。  
負けないモン! (、)

フラグ建築中。しばらくおまちください。くさいっ!?

ギルド会館へ連行されマスタ。

「勘弁してくださいよ、ねえさぁん」

「どれがいつかなー」

ショッピングのように眺めてるのは依頼掲示板だ。

討伐：亜竜族	ブラッディドラゴン	Lv108。
討伐：巨人族	アサルトギガント	Lv102。
討伐：魔族	グレーターデーモン	Lv115。

・ ・ ・ ・ ・

「なんでレベル100越え限定なんスか!」

「罰ゲームだし?」

「死ぬから! これデスゲームだから!」

「きつとなにかに目覚めるって」

「上限解除クエ受けてないから! レベルキャップ解放されてないから!」

リーダーが罰ゲームとしてのクエストを選べるのはともかくとして、選んでるリーダーのレベルが上限になるのはどうなんだよ！

「PT組んでけばあ？」

「ねえさん！ 俺にそんな社交性があると思って！？」

「……面白いくらいディーナと真逆なんだから」

いやほらディーナやってるときは、向こうから寄ってくるから。

そんなバカをやつてると、ギルド会館の二階へ続く階段から、知った顔がふたつ下りてきた。

「あー！」

声を上げて、子虎が階段を飛ぶように下りてきた。  
ついでに母虎も小走りにやってきた。

「よー！」

間違いなく、あの時の二匹だ。

手を上げて挨拶すると、子虎が足にしがみつき、にへーっと俺を見上げてきた。

にへーっと笑い返してやると、がしがしとよじ登りだしてきた。  
服が後ろに引っ張られ、のど元が襟で「ぐえっ」ってなるのを頑張って耐えると、子虎は俺の頭にしがみつくように位置取った。

肩車してやっている、母虎も側に来た。

すこし近い……ってか、寄りすぎじゃね？

両手をお腹の辺りに合わせて、頬を染めて見上げてくる。  
見つめてくる？

なんだこれ？

「昨日は、ありがとうございます」

「ギルドで保護してもらったの？」

「昔、祖父が、ギルド長と旅をしていたんです」

そっぴうつてかあ。

ギルド長の契約獣人だったってことか。

話を聞いていくと、街に入るために必要な身分証として、ギルド長がゆかりのものに渡しているという、特別なメダルを持っていたらしい。

ところが、やっと街にたどり着いたと思って気を抜いたところ、そのまま立ち上がれなくなってしまい、意識も怪しくなってしまうところへ現れたのが俺だった。  
というわけだ。

……なんでこんな、うつとりと見上げてくるんだ？

「ギルドの方だったんですね」

「まあな」

気まずい。

だって！ 俺、ギルドに登録されてて、門を通れるなんて知らなかったんだもん！

あの苦勞、全部無駄だよ。

「本当なら、わたしと一緒になくても、門をくぐれたのに」

ん？

「宿を……って、おっしゃっていたので、探したんですよ？」

ああ……宿場の方の家が使えちゃったからなあ。

「そりゃ悪いことしたなあ」

なんだろう、この人の俺を見る目。

すっげーそわそわするんだけど。

あれか？ 薬代の罪悪感を持たせないように、嘘まで吐いて去って行った奇特なお方とか。

そういう流れか？

「あの、やっぱり、なにかお礼を」

フラグk t k r？

「夫がいてくれたなら、薬代もお支払いできたのですが」

ですよー！

夫とか言われたよ、ちくしょうめ！

「ねえさん、にやにやせんでください」

「まあ良いじゃん。人助け。猫ダスケ。虎？」

「虎ツスね」

「んで、なにやったの？ えろいの？」

「えろくない！ でも微エロ！」

俺は大ざっぱな感じで昨日のことを話した。  
きゃーつとねえさん。

「舌とかやらしー！」

母虎が赤くなりながら補足する。

「すみません、つい（くっ）」

奥さん！？

「エロイよ、この人妻！ 昼下がり！」

「昼じゃねーよ！」

「じゃあ夜討ち朝ぶっかけ？」

「夜通し頑張るとか耐久力あんな！？」

「あんだスタミナは？」

「1024です！」

「エロエロじゃん!？」

話が進まねー。

「んで、母虎さん、昨日のあれ、どういうことだったの?」

母虎さん、お毛毛の下のほっぺが赤くなってるのを気にしてるのか、肉球ハンドで顔を挟んでさすってます。

いいなー、この人。

でも、話し出した内容は、ちよつとろくでもないことだった。

「実は、わたしが縄張りとしていた場所に、ゴブリンが出るようになったんです」

ゴブリン? と、ねえさんは怪訝そうにたずねた。

「でも、虎種の敵じゃないでしょ?」

「普通なら……でも、その中におかしなゴブリンが居て」

「どんな?」

「動物の骨を被って、奇声を上げてるような……」

ねえさんは、ゴブリンシヤーマンか、と呟いた。

「んじゃ、あんたがやられたの、ゴブシヤの魔法ね」

俺も少し考えた。

「その略し方はないかと」

「んじゃゴブーマン？」

「なんか別のものになった！？」

しかもカッター！？

「虎種は力は強いけど、ケダモノ系だから、魔法耐性が低いもんね  
え……」

「んじゃ、病気が疫病の魔法にやられたんスカね？」

「単純に、混乱とか弱体かも知れないけどね。それで体長崩して病  
気になったとか」

「母虎さんの旦那さんは？」

母虎さんは頭を横に振った。

「あの人は」

「そっか……」

「他の子たちのところへ」

「……ん？」

「わたしは、捨てられたんです」



なんだとお!?

どうどうと、ねえさんが説明してくれた。

「虎種つてか虎は、旦那さんのテリトリーの中に、複数の奥さんがテリトリーを持ってるの」

「なん……だと?」

「人の来ないような森の中で、ハーレム作って暮らしてるのよ」

ねえさん、事件です。

「つまり、その野郎は、母虎さんを置いて? ……他の?」

はい……と、彼女は寂しげに笑う。

「わたしとこの子を守るために傷ついて、他の子たちを守ることができなくなったのでは、世話がありませんから……」

俺的には許せん話だ。

「ハーレム作るんなら、全員守って見せろっつもの! それが男の甲斐性だ!」

「一人も困えてない奴が言っと、寒いを通り越して痛いわー」

「泣くよ!? 本気で泣くからね!?!」

「あの……お独りなんですか?」

「「え？」」

「え！ いえ、あの」

きよろきよろと辺りを見たあとで、思い切ったように、くつと顔を上げた。

「わたしを、雇ってもらえませんか？」

俺は、ねえさんに目配せをした。

ねえさんも、あれ？ ってな感じだった。

「母虎さん、戦えんの？」

「あ！ いえ、それは……」

だよなあ。

戦闘用のNPCとして仲間になれる虎種は雄だけのはずだし。

「でも、身の回りのお世話ぐらいなら」

あー、そういうことね。

つい、ゲーム的な意味での雇う＝戦闘要員って解釈しちゃったわ。

でも、その勘違いを抜きにしても、ねえさんは、できないでしょ、  
っと冷たかった。

「虎種って、必要がなかったら素っ裸の四つ足で走り回って狩りを  
して暮らしてるじゃない？ 人の世話とかできるの？」

「それは……」

「それに、こいつに助けてもらったとき、正体を隠してたの、奴隷狩りに見つからないようにしてたんじゃないの？」

しゅんつとされると……萌えるなあ。

とか、うずうずしてしまう。

しかし現実問題としては、確かに家政婦としては難しい。

人間の世話ができるか、どうとかってだけじゃなくて、この間の話もある。

口の臭かった件だ。

虎種は、火を恐れたりはしないけど、使っちゃってというと、使わない。

体が資本の、野性的な種族なんだ。

歯を磨く、湯や水で体を洗う、そういったことさえしない。

ねえさんの言うとおり、けだもののように暮らしてる。

それでも、そうですね、と、しゅんとしているところを見ちゃうと、なあ。

「ギルドマスターは、なんて言ってるんだ？」

「誰か、知り合いのいい人を、探してくださいと」

「ギルドマスターが庇ってくれるんじゃないの？」

「虎種は、色々な方に、狙われますので……この子も居ますし」

ギルドマスターには迷惑をかけたくないけど、俺なら良いってこ

となんだろつか？

なんか違うつぱいと首を捻っていたら、ねえさんが教えてくれた。

「宿場町の家、防犯機能があるでしょ」

あれか！

許可してるプレイヤー以外は出入りできなくなる奴。

「あれ、NPCにも効果あるんですかね？」

「あるんじゃない？ 契約モブとか連れて入ることができるんだから」

なるほど。

後頭部に張り付いてる子虎をゆらゆら揺らして考える。

なんか、俺の頭にお腹貼り付けて、額のあたりに顎を落として、むふーっとか言ってる。

気持ちよさそうだな。

母虎さんは、なにかを期待して、ちらちらとこつちを見る。

同じ誰かに預けられるなら、信頼できる人の方が良い、ってことなんだろうな。

「でも、ディーナがなあ……」

「それよりも、旦那さんの方じゃない？」

「へ？」

「もし奥さんが、他の雄んとこに行くようなことになったら、取り戻しにくるんじゃないかなあ」

「いやいやいや！ 虎種と修羅場とか、シャレになんないっすよ！」

「まあそれがなくっても、旦那さんがどうなったのかは、調べるべきだろうし」

ちょうど、つと、ねえさんは、討伐依頼を一つ選択した。そのフィールド情報を母虎に見せる。

「ここ、あなたの根城だった森？」

「はい」

待って！

ねえさん、その顔はヤバス！  
ひっじょーに良い顔でした。  
黒い意味で！

ねえさんは、館内全域に響くような大声でシャウトした。

「けってー！ 罰ゲームはゴブ退治〜！」

「うええ！？」

「んでもって旦那と決闘！」

「ないっ、それはないから！」

母虎さんが顔をのぞき込んできた。

「頑張ってください！」

むんつて。

なんで両拳<sup>にくきゅう</sup>を脇<sup>う</sup>にひいて応援なんですか!?

「いやいやいや、旦那さんと、よりを戻してくださいよ!？」

「人は過去に囚われていては前に進めません！」

「虎ですよね!？」

「雨季が繁殖期です！」

「家政婦とかって話でしたよねえ!？」

「いまならその子も付いてます！」

「付けんなあ！」

とりあえず、第一にゴ布林退治、二番目に旦那搜索。三番目に……交渉と言うことになりました。

子連れ寝取りで親子どんぶりとかねーよ。

どんだけ上級者なんだ、俺は。

「頑張れDT<sup>どーてー</sup>」

「俺、生きて帰れたら、非DT<sup>ひどーてー</sup>になるんだあ……」

逃亡したいの意味だから、フラグの建て方は間違っていないと思います( T T )



クソゲーってやたら設定が凝ってる上に、直感的には遊べないシステムを取って  
転移呪符発動。

魔法陣の外から、ねえさんが。

「一つ言っておきたいことがあるの」

「なんスか？」

「帰ってきたあんたを待ってるのは、子連れ寝取りで親子どんぶり  
だけじゃない……獣姦もよ！」

テレポートが終了する前にスローイングナイフを振りかぶったん  
だが、投げ終わった時には転移がおわっていた。

くやしい！ さすがねえさん！ 獣姦とかねえよ！

「初めてがモブNPCとか悲しすぎるじゃないですか。そうでしょ  
う、ねえさん……」

せめて人間がいいです。

可愛い子なんて贅沢は言いません。

だってこのままだと、最初すらなさそうなんだもん。

始まることすらないかもしれない。

いかん、泣けてきた。

ところで、ここは母虎さんが住んでいたという森の中である。

母虎さんの縄張りほもつと奥の方らしいから、ここからさらに移



動となる。

ギガンディアスの西方に位置する森だ。名前があるほど立派でもないが、直進するよりも迂回した方が、向こう側に抜けるのは速い。それくらいには深く危険。

俺の背後には、ギルドが置いている要石があった。  
使用した呪符の転移目標となっている石だ。マーカー

転移符は、ギルドから受け取ることができる。  
クエストをクリアするともらえるポイントと交換だ。

特別な場所への転移符になると、イベントでの配布やクエストでの報酬として配られることになるんだが、この森は特別なフィールドというわけでもないんで、呪符の入手はくり返し可能だ。

「んじゃま、行きますかっつと」

あ、すみません、どもどもと、腰を低くして通り過ぎようとしたところ。

「いぶーーーーー！」

ゴブリンどもが騒ぎ始めた。

「転移先は安全地帯のはずだろ！？　なんでゴブリンが！」  
アンチ

それも何十匹もって！  
んでもって俺は、そのど真ん中に！



イラッ

なんか、がっちゃがちゃに鎧を着込んだゴブリンがショートソードをかつこよく突きつけてきたんです。

「なんなのこの状況!？」

「そのヒキニート!」

「誰がだ!」

「すまん! トレインしちまった! 助けてくれ!」

ゴブリンのような集団種族は、一匹戦い始めると、集うように寄ってくる。

このため、下手な場所で戦うと、あっという間に囲まれちまう。そういう状況で逃げ回ると、まるで電車ごっこのように後に続いて追ってくる。

増えながら。さながら連結するかのように。

この状態が、トレインだ。

「あんた誰だ!」

「ザ・プラクティスのメンバーだ!」

見た目20代?

弓と細身の剣に、簡易鎧。

レンジャーっぽい。

ディーナとしての記憶を掘り起こしてみてるんだけど……。

こんな奴、いたかなあ？

「ディーナは？」

「お前、ディーナの知り合いか！？」

「あいつはどこだ」

「奥だ！ 俺は戦闘中に絡んできたゴブを引き離そうと思って……」

「こんなところまで引つ張ってきてんじゃねえよ……MPKかよ」

MPKは、モンスターを使ってプレイヤーを間接的に殺っちゃう  
悪質なプレイです。

直接やるのと違って、業<sup>カルマ</sup>を上げなくても済むので、非常にお得で  
すが、みなさんは真似しないでね！

にしても必死だな、こいつ。

「俺は死ねない、死ぬわけにはいかないんだ！」

かつこいいこと言ってるけどさーと。

巻き込まれて死亡とか、間抜けすぎるのでなんとかしよう。

「とおっ！」

なけなしの魔力で閃光魔法を破裂させる。  
一瞬遅れて、マクロ起動。

「蒸着！」

ゴブリンたちが目をくらましているその隙に、一瞬でメイン装備に換装を完了する。

彼らが再び目を開いたとき、そこにはカッコいい鎧騎士が誕生していた。

俺である。

「説明しよう！ 荷物持ちフラグは、マクロを使うことによって、わずか一ミリ秒で武装を変更できるのだ！」

「いやそれ普通だから！」

む？ マクロによる装備変更を知ってるってことは、こいつプレイヤーか。

マクロによって、変更された装備は以下の通り。

頭：竜の顎。

胴：竜の胸骨。

腕：竜の爪。

武器：竜の牙。

竜と名の付く防具は、本当は他にもあって、シリーズとなるんだけど、他の部位は、使わないと思って、宿に放り込んだままにしている。

顎は竜を象った兜。開いた口から、俺の顔が覗けてる。

胸骨は、背中から脇を通って、胸と脇腹をくわえ込んでいる鎧だ。爪は肘から爪のように伸びている部位のある、手っ甲と盾が一体となったもの。

牙はまんまだ。竜の牙から削り出した剣。ロングソード

竜の骨つてのは、単純なカルシウムではできていない。でなければ、あの体躯を維持はできない。

竜は、生まれたときはカルシウム製の骨であるのだが、体が大きくなるにつれて、魔力による補助と強化を行い始める。

そうして、骨には強く、竜の魔力がしみこむのだ。

その身の内で魔力に漬け込まれ続け、魔力が物質化し、固化し、カルシウムに変わって骨そのものとなるまでに至った凝縮体。そりゃ強かるうて。

よって、その骨から作り出されたこのシリーズは、強度　物理的な攻撃に対する防御力だけなら、ゲーム中最強と言われていた。そして攻撃力に対するブーストも半端ない。

牙がそうだ。牙の剣は、物体の分子結合を破壊するかのような崩壊現象を、対象に与える能力を持つ。

竜の牙にかみ砕かれるように、竜の骨で作られた武器の前には、どんな盾も鎧も紙のように引き裂かれる。

ただし、今の状態では不完全だ。

竜のシリーズは、全部を着ることによって、初めて竜の加護を發動させる。

竜が生まれながらに持っている防御結界を發動するんだ。

つまり、今の状態じゃ、攻撃特化も良いところ。

まあ装備品としてはわりとレアだし、驚いてもらって良いんだけど……。

「待て!？」

「え？」

「マクロだって？」

「へ？」

「なんでお前、マクロが使えるんだよ!？」

……どういうこと？

なんかこの人、違うところに引っかったみたい。

でもま、今は気にすることじゃない。

竜の武器が放つ剣呑なオーラに、ゴブリンたちが後ずさる。

「確かに俺は、荷物持ちだけだな」

半身に構え、武器の柄は頭の横に。

刃は敵へと水平に。

両手で支持する。

「荷物番つてのは、普通じゃないものを、いっぱい持つてるんだぜ」  
「？」

俺は牙を振り上げ、降ろした。

気合いと共に。

「ドラグーン・ブレイカー！」

厨二病っぽい雄叫びと、竜シリーズの放つオーラに、ゴブたちが  
びくりを身をすくめて……まぶたを閉じた。

うん、天井は基本です。くり返しさんくー。

彼らが再び目を開いたとき、その時が……きっと彼が死ぬときだ！

「独りで逃げんなあ！？」

さらば、友よ、君のことは忘れない。

いやちゃんと『BOT妖精／回復の君』を残してきたから。

あの程度の被ダメなら、妖精が消える前になんとかなるだろ。

ちなみに、BOTってのは、自動プログラムね。つまり妖精さんが自動で回復魔法かけてくれるってこと。

この系統のBOTは、大抵のMMORPGで、外部プログラムとして開発され、公式からは違法、違反として取り締まられる系統のものだけど、多くで必要とされると言うことは、需要があると言うことだ。

というわけで、運営さんが作ってくれた公式妖精さんです。

見た目、十二・三才くらいの少女で、手足の細い未発達な姿をしており、背中に四枚の羽が生えている。大きさは手のひらにお尻が乗るくらい。

そんなのがふわふわと目の前に浮いて、にっこりと笑って癒やしをくれるんだ……。

おかげで、三角座りでじっと眺めて癒されるお兄ちゃんたちが続出し、一時期ロリ問題による社会バッシングを受けました。

YES！ ロリータ！ NO！ タッチ！

ドラゴンレジェンドは多くのヘンタイ紳士によってプレイされるVRMMORPG……でした。



あえて目標を設定するなら、ここはどこかということですかね。

森の中を駆ける。敵は見えない。

竜の武具を取り出した理由の一つがこれ。接敵回避だ。

特定レベル以下のモンスターとの、エンカウントがなくなるやつね。

もつとも、完全回避ってわけじゃない。シリーズの装備数で確率は変動する。

竜と名の付く武具は、どのシリーズにも同じ効果が付いている。装備すると、竜の気配をまとうているということになるんだ。それは数が多ければ多いほど、気配が強くなると言う扱いになる。

よって非力なモンスターは、自分から逃亡する……という設定だ。

地面には、大勢のゴブリンが、かけっこをして踏み荒らした跡が残されていた。

今はそれをたどり、走っている。

ちらりと肩越しに後ろを見る。

背の低い木の枝が重なっていて、要石の広場はもう見えない。

俺は違和感を覚えていた。

それは置き去りにしてきた男のことだ。

あいつは、ディーナと同じギルドのメンバーだという。

この場合のギルドってのは、気心の知れたもの同士で、身内的につるんでる連中のことだ。

仕事を紹介してくれるギルドとは、また別ものだ。

で、あいつは、すくなくとも、ディーナと一緒にクエストをこな

しに来ていたみたいだった。  
そして、戦闘もやっていた。

おかしくないか？

ディーナのレベルは150だ。

間違っても、ゴブリンにダメージを食らうようなことはない。

強いゴブリンはもちろん居るけど、ゴブリンの最大レベルは70で、つまり、俺と同じ程度なんだ。

そんなディーナとパーティを組んで、クエストをこなそうって奴が、あの程度の数のゴブリンで泣きを入れるって………どういうことだ？

レベル150と70の間には、越えられない壁がある。

具体的には90くらい？

つまり、二回目のレベルキャップの解放あたりだ。

レベル90以上のキャラに対して、レベル70以下のキャラは、クリティカルが発生したとしても、1以上のダメージを与えることはできなくなるんだ。

闘気とか魔力障壁とか、いろいろ後付け設定が出されていたけど、ほんのところはシステム上の問題だ。

ダメージ計算上、そうなってしまっただけの話である。

最大レベルが70であつたところには、考えられていなかった問題だった。

それからもうひとつ。

ディーナが今受けているクエストだ。  
いったいどんなクエストなんだ？

カンスト組のディーナが、パーティを組んで受けなきゃならないクエストってなんだ？

難易度が見えないんだが……。

そんなクエストが、今、この森で発生してる？

虎種が、ゴブリン相手に、きついことになってるらしい、この森で？

いや、ゴブリンのクエストがメインなのか？

そのクエストの演出の一つとして、虎種が巻き込まれてる？

わからん……。

巻き込まれたくないんだが……ディーナの方を探ってからにするべきだろうか？

そう言えば……。

わからんと言えば、マクロのこともあったなあ……。

もしかして、ステータス画面とか、あれ、俺だけなのか？

ログウィンドウとか……あれも、謎って言えば謎だしな。

いったいどんな仕様で、周囲の会話を文章変換して、ログとして記録してるんだって話だよな。

俺自身に、そういうスキルがパッシブで備わってるんだろうか？

んで、本題のマクロだ。

マクロってのは、いわばプログラムだ。

書式に沿って行動、対象、経過、結果などを記述し、ワンクリックで実行する……というものだ。

たとえば、『装備：主武器：ロングソード』とする。

このマクロを実行すると、自動的に利き手にロングソードが出現するわけだ。

他に、『装備：胴：鉄の鎧』でも良い。

俺は走りながら、ガチャガチャと音を立てる鎧について考えた。

一ミリ秒？

確かにおかしい。

実際には、もうちょっとかかってた。けど、一秒未満だったのは間違いない。

こんなものが、どこからどうやって、一瞬で出て来たっていうんだろうか？

それについては、もう気にしないでおくとしても、一秒に満たない間に、装備が解除され、持ち運び袋の中にしまわれ、別の鎧が出現し、俺の体に装着される。

どういう理屈が働いてるんだ？

着るとか脱ぐとかって問題じゃないよな。

本当に鎧を着ようとすれば、身につけるのに相当の時間と労力を必要とする。

特にこんな、ゲーム仕様のデザイン品なんて、どうやって組み上げられていて、どうすれば体に装着できるのか、想像もできない。

たぶん、労力とか以前に、不可能なんじゃないだろうか？

仮に着込めたとしても、運動できるような形で、体に固定できるとは思えないんだが……。

「やっぱり、ゲームの中なのか？」

しかもウィンドウとかの特典仕様<sup>チート</sup>？  
もしかして、俺、主人公属性ついてるの？  
マジデ？

じゃあ魔王とか居て、倒すまで終わんないの？  
……とか、つい首を捻ってしまう。

「ん~~~~」

だけど、鎧がこすれることによって付いた草の汁の臭いや……。  
踏みつけるたびにそれなりに沈む、堆積した腐葉土の感触はあまりにもリアルで……。

「どうも良くわからんのだよなあ……」

走りながら、俺は自分の頭をかきむしりたくなっていた。  
俺、こんなに頭の回転、鈍かったかなあ？  
あ……と、俺は嫌なことを考えついた。  
まさか、フラグのINTに影響されてんのか？

青くなる。

次、レベル上がったら、ちょっとポイントの振り分け考えて見よう。

そう思った。  
その時だった。

ガアアアアア！

獣声が、轟いてきた。

一斉に、森の鳥が逃げるために羽ばたいた。

小動物も逃げていく。

すねに何かがぶつかる感触。見下ろせば足をネズミが踏んづけていった。

あまりのことに、俺は足を止めてしまっていた。  
はっとして、俺は再び駆け出した。

茂みを抜けて、先へ進む。

やがて聞こえてきたのは、「はあ！」とか、「やあ！」とか、  
「どうだ！」とか、勇ましい戦いの声と、それに向かい合っている、  
獣の吠える声だった。

「ちえーんじ、アサシンモード、すいっちゃん」

スピードを落とし、装備を換装する。

布生地をメインにした、音のしないものばかりを選んで着込む。  
色は黒だ。さらに顔も頭巾で隠す。

あぐく、レアアイテム、姿隠しの外套を取り出して、身に纏う。

効果発動、終了まで3分。

こっそりと隠れて、戦いの場をのぞき込む。

そこではディーナと、その仲間たち……総勢五人が、雄の虎種と戦っていた。

あんまり深い裏設定を作っちゃうと説明文が長くなるから嫌なんだけど、厨二訛

なんだ、あれ？

俺には理解できなかった。

虎種というのは、モンスターではない。亜人の一種で、プレイヤ  
ーを助けるNPCだ。

体躯は人よりも大きいが、かけ離れていると言っほどもないはずだ。

なのに、その虎種は、二メートル半をゆうに越え、三メートルに  
迫ろつかという、大型だった。

上半身が大きすぎて重いのか、やや前のめりに背を曲げている。  
両手は人の頭よりも大きく、血にぬめっていた。

足はずっしりと太股に大地を踏みしめ、かかとを上げている。

まずい……嫌な予感に襲われた。

虎種は体重を前に傾け、その倒れる勢いを足して、前に出た。

一歩目で最速に、二歩目では腕を振り上げ、三歩目で腕を振り切  
っていた。

ディーナの仲間らしき男の上半身が吹っ飛んだ。

魔法付きの武具らしい白い鎧は、胸から腹に掛けて引き裂かれて  
いた。

胴体が宙を舞う。内腑がこぼれ、繋がっている腸が下半身を引き

ずり倒した。

「ダッド!？」

誰かが叫んだ。

バウンドした上半身は、隠れている俺の目の前に転がった。  
首がごろんと、力なくおかしな具合に曲がり落ちた。  
極限まで開かれたまぶた。目は半分だけ白目を剥き、瞳孔の開き  
きつた黒目が、上まぶたのふちから三分の一だけ見えていた。

俺は、震えて、動けなくなった。

(なんだ、よ……これ)

血の臭いに、ぐっとむせて、口を押さえる。

(死んだ?)

目の前にあるのは死体だった。

(死体、だ)

わかりきっているのに、思い返して確認してしまった。

千切れた胴体と下半身。血がだらだらと溢れだし、土を黒く染めていく。

半端にこぼれた内臓はまだピンク色だったけど、森の枯れ葉と土にまみれて汚れていた。



それは、これ以上となく、死体だった。  
消えもしない。

ゲームのように、ぼかされてもない。

プレイヤーを助けるためのNPCが、プレイヤーを一撃で死亡させた。

一撃死なんて、そうそうあるもんじゃない。  
思わず、ログウィンドウを開いてしまった。

(ダメージ、3000!?)

魔法でもない物理攻撃で、レベル150でも耐えられないような  
ダメージが発生しているなんて、異常すぎる。

グルルと唸り、獣が次の得物を見定める。

そこには白いローブ姿の、おそらくは回復役の女が居た。

「ちょっと！ こっち来る！ 誰か引きつけてよ！」

「無茶言っな！ 盾役が一撃だぞ！？ 支援魔法が先だろ！？」

「イベントシーンの直後に問答無用って酷くない!？」

回復役の女、軽装備の戦士の男、重装備の男……これは騎士タイプか？

「くっそ、立て直せねえ!？」

それから死んだ男に、ディーナ。

ディーナは、一角獣の鎧と呼ばれる、純白の重装甲を身に纏って

いた。

その顔は酷い色をしていた。仲間の死にショックを受けているようだった。

「だから先に支援魔法かけておこつて……」

「うつせえ！」

ディーナはびくりと体をすくめた。

そして、首をすくめたまま、でも……と相手の様子をつかがっていた。

そこに俺は違和感を感じた。

なんだかなにかおかしいな雰囲気だった。

ハブられてるような空気があった。

ディーナも、みんなの顔色をうかがっている。

怖がっている？

俺は……ディーナは、こんな風に扱われるようなキャラじゃない。人のために前に出て、みんなとじゃれ合い、弾けるような……。そついうキャラを演じてた。

それに、だ。

俺は、いま居るディーナ以外の面子について、覚えがなかった。

（俺の知らないメンバーだと？）

いぶかしく思っている内に、ディーナがくつと、顔を上げた。

決意をかためた顔をしていた。

「あたしが！」

オーロラの輝きがこぼれる直刀を手に、駆け出した。

横合いから虎種へと斬りつける。

跳ねるように飛んで、両手でもっての一撃だったが、勢いと体重の乗っていたそれも、虎種に簡単に受けとめられてしまった。

右腕を持ち上げただけ。二の腕で、だ。

虎種の獣毛は、下手な武具よりも硬いとされている。にしても、これは……。

（ダメージ、0って……）

レベル150のディーナが、勇者装備と言われる天剣を使って、ダメージを通せないなんて……。

種族特性の物理、魔法防御壁無効化。魔法による耐性防御無効化。天剣にはそんな能力があるのに……。

（あの虎種、特性じゃなくて、素の防御力が、反則級チートなのかよ……）

虎種は、隣に降り立ち進退窮まっているディーナを見下ろした。

「あ、あ……」

ディーナの顔が絶望に染まる。

かかとうが無意識に下がろうとしていた。

だが虎種は、ふいと、その存在を無視して、回復役へと向き直っ

た。

そして口にする。

「警告する」

「へ……?」

「使用されているユーザーIDは、本運営によって正規に発効されたものではない。ただちに退去せよ」

「は……?」

「警告を拒否と判断する。規約に基づき、強制排除する」

「ちょ、ちょっと！ 規約ってなによ!？」

虎種は女の真正面に立って、その大きな体で彼女の上に影を落とした。

「ひっ!？」

俺の視界からは虎種の背中しか見えない。

その向こうで……ぶしゅりと赤い血が弾けた。

その光景に、ザ・プラクティスの面子は、引きつりながら後ずさった。

「なんだよ!？ 獣王クエストのはずだろ!？」

「運営の垢バンか!？」

あいつら、この状態でまだゲームだと思ってんのか？  
確かに、虎種の口にした内容はそうだけど……。

(っていうか、垢バン……アカウントの削除だって?)

あの虎種が、運営……あればだけど、それに相当する何者かが操作してるキャラクターなら、なにが起こっているかは納得できる。

できる……けど。

(これは、やり過ぎだろ)

不正ログイン 金を払ってゲームを始めず、パスワードを解いて、無断で勝手にゲームをやっていた……ということなんだろうけど。

俺たちは勝手に連れてこられたんだぞ？

俺は望んでた。でも、未だにゲームだと思ってる連中がどうだかはわからない……。

虎種は、あとの二人も逃がさないようだ。

喉をグルルと唸らせながら振り返った。

巨大な右手の毛が赤く染まり、血は爪から滴り落ちていた。

軽戦士が愚痴る。

「システムメニューもマクロも使えなくなってるし、対策入ったのか？」

待てよ？

その言葉に、ピンと来た。

俺は、システムメニューを呼び出した。  
繋がってくれと願いながら。

（ねえさん）

（なにー？）

繋がった！

（急いでる、答えてくれ。システムメニュー、マクロ、そういうの、  
使える？）

（使えなきゃ、チャットできないでしょー）

（だよな、ありがと）

おかしい奴みたいに思われたけど、よかった、ねえさんもだ。  
俺たちは、ユーザーとして、ここにいるのかもしれない。

だけどゴブリンに追われてた奴も含めて、不正にログインした奴  
は、そういうの、使えないのかもしれない。

虎種……あるいは虎種の中の奴、もしくは虎種を動かしているA  
Iは、単に不正ログインをしている偽ユーザーを排除しているつも  
り……なのかもしれないけどさ。

だけど……と死体を見る。

（それが、これか？）

あいつらは、ゲームの世界に行ってみたいと、願っていたんだろ  
うか？

街でPTを組んで、ここまで来ているのなら、それなりに時間を  
過ごしてるはずだ。

なのに、いまだにゲームの中だと思ってるような連中だ。  
信じたくないから、目を背けているのか。  
信じられなくて、ゲームの枠から外れたくないのか。

「回復役がまっさきとか！　ねーよ！」

「なんとかしろよ、ディーナ！」

「なんとかって……」

「使えねえなつ、モブディはよ！？」

俺の頭の中で、かちんと、なにかの音がした。

「ザ・プラクティスのディーナっつーから、期待したのによ！」

「俺たちと一緒に、来てんのかって、思ったのに！」

「中身モブとかねーよ！？」

（あいつらっ！？）

騎士と軽戦士の二人の口は、死を前にして、軽く、ゆるくなったようだった。

腰が引ける状態で、ガクガクと震えながら後ずさっている。

虎種　獣王とやらは、そんなふたりを、尊大に見下ろしていた。

軽蔑　唾棄すべき存在。

汚らわしいとばかりに、敵意をあらわにしていた。

ずんつと、音を鳴らし、地を揺らして、足を踏み、前に出る。

自分が先に狙われることになったとわかった軽戦士が、背中を向けてかけ出した。

「待つて！」

それを追いかけようとする獣王の前に、ディーナが割り込んだ。

「あなたの相手は！」

じろりと、獣王はディーナを見た。

「警告する。お前の行動は、当レジャーパークにおける運営活動の妨げとなっている。アクターは指示に従い、ホームへと帰還せよ」

わからない！　つとばかりに、ディーナは何度もかぶりを振った、

両手に持った剣をかまえ直し、ちゃきりと独特の音をさせる。

「お願い！　あなたはゴブリンシャーマンの魔法で、おかしくなってるのよ！　正気に戻って！」

必死の説得。

だが獣王は、変わらずディーナを見下ろすだけだ。



彼女の手は、足も震えていて、その震動が切っ先にまで伝わっていた。

まなじりに涙が浮かんでいた。

獣王は、生きているものとして、ディーナを見ていなかった。

まさに物を見るような目だった。

その足に、力を溜めるように、身を沈めていく。

俺は頭が真っ白になった。

死ぬ？ ディーナが？

獣王が、力を溜めていく。

ボロクズのようになった死体と、ディーナと、獣王と。

視線の先に、全てが一直線に並んでいて。

次の瞬間には、このボロクズの上に、同じ形の同じ死体が……ディーナが落ちて、男と同じように、うつろな目を俺に向けるのかと………思うと。

「」

俺はなににも考えずに。

考えられずに、飛び出してしまった。

転移転生したからには主人公化してもらいますw

かちかちと歯が鳴っている。

ディーナは、死ぬと悟ったようだった。

「そのまま押さえてろ！」

「じゃあな！」

ディーナを置き去りにして、二人が逃げる。

そんな……と、ディーナは、振り向きたい衝動を堪えているようだった。

プレイヤーの二人は、ディーナのことなど気にもしないで、駆けていく。

NPCだとも思っているのだろうか？  
プログラムだから、使い捨てにして殺しても問題ないと思っているのだろうか？

捨て石にされたと、置き去りにされてしまったディーナの顔に、絶望の色が広がった。

気力の減少とともに、剣を支えることができなくなって、切っ先が重く、下がっていく。

その姿は、プログラム計算なんかではなく……。  
心のある、存在だった。

虎種が動く。

殺意が巨大な影となって、小柄なディーナを押し潰す。

「ディーーーーナー！ー！」

そんな未来絵図なんて見たくない！

俺は茂みから飛び出して、ディーナへと突進した。

「フラグ！？」

俺はディーナの体を抱きかかえ、すっ飛ぶように転がった。

抱きかかえたとき、ディーナの驚きが呟きとして聞こえたが、それどころじゃない。

ディーナと一緒に転がった後で、庇うように背にしてひざ立ちになる。

獣王が来る！　つと、俺はナイフをかまえたんだが……。

「へ？」

獣王がいない。

獣王は、俺たちを無視して、大きく飛んでいた。

「げえ！」

「こっち来た！？」

まずは装備の重い騎士がつかまった。

獣王の巨体　二百キロとか、三百キロとかあるんじゃないだろうか？

そんなものが、両足から落下した。

騎士を背中から踏みつけ、踏みつぶす。

騎士は、足、膝、体と、かっくんと、こっけいに潰れていった。

ぐちゃりと踏みつぶした獣王は、今度は四つの足で大きく跳んだ。

「ひっ、ひい！」

軽戦士が、後ろから迫るものに恐怖した。

獣王の前足が軽戦士を押し転がす。

「がっ！」

前足で、後ろ足で踏んづけて、獣王は勢いのままに、軽戦士を追い越した。

足を滑らせながら身を曲げて、振り返る。

「ひ、は！」

うつぶせに倒れ伏すことになった軽戦士は、泥だらけになった顔だけを上げた。

涙声だった。

ゆっくりと獣王は歩み寄り……。

獣王は右の前足を振り上げ、軽戦士の頭を碎いた。

血まみれの獣王が、緩慢に立ち上がる。

「不正ログインによる、未確認ユーザーの強制排除を執行」

そして獣王は、俺を見た。

「その臭い、マリアの子の臭いか」

「へ？」

なんだ？

唐突に獣王は、普通……当たり前のキャラクターに戻った。

膨らんでいた毛皮が落ち着き、血走っていた目も、冷静さを取り戻していた。

「臭い？」

「お前からは、俺の子の臭いがする」

首の辺りからと言われ、俺は首筋を押さえ……。

「あつ！」

子虎を肩車してやったことを思い出した。

「マリアは無事か」

「あんたが……母虎さんの、旦那か」

「お前の言う母虎が誰かは知らない。だがその臭いをさせている子の母親なら、そうだ」

「他の雌虎と子供を助けるために、母虎さんを見捨てたんだろ？  
こんなところでなにやってんだよ……」

「テリトリーを守っていた」



「テリトリーって……」

俺は、転がっている三人を目にした。

「ゴブリンが荒らしてたんじゃないのかよ」

「怪しいものは、狩る」

「俺は……」

「その臭い、警戒、興奮しているものが付ける臭いではない。お前は新しい群れのリーダーに選ばれた」

「群れ？」

「そうだ」

虎種は笑った。

それは決して友好的なものではなかった。  
あざけるような、面白がっているような、面倒くさいものだった。

「俺の群れから女を取るとは、なかなかやる。だがな、許せるものではない。わかるだろう？」

わからねえよ！

結局、戦闘は回避されそうにない感じだった。

戦闘は次回から！

俺は混乱していた。

運営側の活動が終わって、ただのイベントキャラに戻った。  
そんな感じだった。

だけど、そんなに簡単には、切り替えられない。

割り切れない。

「ディーナ」

「はっ、はひ！？ なに！？」

「お前のクエストを教えてくれ」

「……え？」

「早く！」

怒鳴ると、ディーナはびくんと体を震わせた。  
怖いのか、びくついているが、関係ない。  
教えると、無理矢理に迫った。

竜、狼……そして虎。

この三種は、三強と呼ばれる種族である。

その一角である、とある虎種の一族に危機が訪れていた。

この国の虎種の中には、ギルドマスターとも親しいグループが存在している。

ギルドマスターと契約していた虎種がいて、その家系がいまでも繋がりを保っているからだ。

その虎種のテリトリーが、ゴブリンに犯されたっていうんだが……。

……俺が母虎さんと子虎さんを助けたから、起こったクエストだっということらしい。

こんなクエスト、ゲームの中にはなかったんだが……。

とにかくだ、虎種が危機に陥るような事態だからと、ギルドに登録されているメンバーの中で、最上であるディーナのチーム、ザ・ブラクティスが選抜されたが……あいにくと、ディーナには、他のメンバーを集めることができなかったらしい。

そのメンバーというのが、俺には大きな問題に思えた。

急ぎであつたため、連絡を取ろうとしたんだが、あいにくと捕まえることができなかったと言うんだが……俺が気にしたのは、その理由だった。

もしかすると、俺と同じなのかも知れない。

もし、本当に、その連中が、なにかしらのクエストに出ているだけだったのなら、問題はないんだけど、俺と同じ、元プレイヤーだったなら？

もしかすると、それどころではなくって、引きこもったり、拒絶してしまったりしているのかもしれない。

ともかく、そんなディーナに話しかけてきたのが、あの連中だった……ということだ。

……即席メンバーだったのか……道理で知らない連中だったわけだ。

あいつらは、不正にログインしていたプレイヤーだった。だから直接ギルドで仕事を負うことができず、困っていたディーナに目を付けたんだろう。

不正ログインは、普通にプレイしている程度では、見つかる頻度は低かったりする。それこそ一個のサーバーに、常時三千人前後がログインしているし、運営だって、枯れたゲームに、そこまでちゃんとした監視の手を入れているわけじゃない。

それでもだ、クエストなどのイベントとなると、話は別だ。クエストを受ける際に、キャラクターの正規情報ユーザーIDがチェックされる。

クエストの一部は、課金によってオープンになるものがある。

初期クエストや、無料の追加クエストは、タダとして処理される。

この課金チェックが、クエストの発生するキーキャラに話しかけた際に、行われるんだ。

そして、コンテンツが解放される。

プログラムを改編して、クエストをオープンにすると、NPCの会話内容など、つじつまの合わない部分が大量に発生してしまう。

それをクリアしたとしても、アップデートの度に、プログラムは細かく変更されてしまうので、まったく労力に見合わない。だから、この方法を取っている人間はかなり少ない。

それに、だ……もつと簡単な方法があったりする。それが、連中の取った方法だった。

後から、クエストを受けたパーティに加入する。それだけで良いのだ。

この方法でなら、イベントは見られないが、課金の必要はなくなるし、特典は受けられる。

特典を受けるのが、依頼を受けた、<sup>リーダー</sup>デイナーだからだ。

特典は、彼女からの分配を願えば良い。

その方法でなら、ただのトレードだ。チェックされることなく、レアアイテムを手に入れられる。

もちろん、エクレアアイテム……エクセレント・レアアイテムは、譲渡不可だ。

こればかりは諦めるしかない。クエストを受けた人間だけが受け取れ、手伝った人間には渡らない。

そのため、普通、6人パーティなら、6回、同じクエストをこなすことになる。

全員が、手に入れたいわけだからな。

だけど、不正にログインして、ゲームをやってる連中は、あんまりそういうのに、こだわりはない。

もともと、アイテムだけが目的なのが、多いからだ。

その理由は、<sup>リアル・マネー・トレード</sup>RMTだ。

アイテムの現金化。

そのためのクエスト制覇。

どこのMMORPGでだって、あることだ。

ただ……普通、イベントシーンは、コンテンツが解放されていないと、プログラムが追加適用されないの、見られないはずなんだけど……。

（そこは、現実だから……ってことか）

それにしたって……と、俺はこの惨状に眉をしかめた。

普通は、クエストを請け負う時に行われるはずのチェックを、イベントで出て来るボスに行わせたのか？

そりゃ、クエストをこなしていくことが、ゲームの主な目的なんだし、必ず通るところなんだから、仕掛ける場所としては正しいんだろうけど……。

だからって、こいつは、強いとか何とかって話じゃないだろ。

「勝てる気がしねえー……」

「フラグう……」

ディーナが不安げに身を寄せてくる。

背中を小さな手がぎゅっと握ってくる。

すぐるように体重を預けて引つ張り下げる。

俺は、肩越しに目をやった。

長いまつげ、潤んだ瞳、桜色の小さな唇。

鎧を着込んでいるというのに、こんな森の中だというのに、少女を感じさせる柔らかさと体臭を感じられる。

可憐だ……と思う。

守らなきゃと思ってしまっ。

……自演なんですけどねー！

ちくしょうっ！　なんだこのむなしさは！！

俺がやってたことを、素の行動としてコピッてんだろっか？  
せめて演技でないと思いたい（　、　）、

それでも、まあ。

「まかせろ」

俺は、ぽんつと彼女の頭に手を置いて、獣王の前に立ちふさがった。

本当の意味で、このディーナが俺が演<sup>や</sup>つてたディーナと同じなのかどうかはわからない、けど。

「俺のディーナに、手え出すんじゃないよ」

育ててきた俺には、俺の<sup>メインキャラ</sup>ディーナにしか見えなかった。



長くなったので二分割（１）

獣王の口の端がつり上がる。

覗いた牙は、意外なほどに白かった。

（救いがあるとしたら、さっきまでのデストロイモードじゃないってことだな）

恐怖心を、あおられたりはしなかった。

ただ、表情を変えたただけだと、わかったからだ。

（笑ってやがる）

負けじと、俺も笑ってやった。

……俺、いま、イケてる？  
光ってる？

正直、足がガクブルだ。

さっきのは、狂獣化とでも言うんだらうか？

体毛が膨らむと、毛の質でも変わるのか？

絶対防御とか反則過ぎ<sup>チート</sup>んだろ。

だけど、いまはそうじゃない。

被ダメ0じゃないってんなら、勝算はあった。

NPCとしての、虎種のレベルは、100あたりが上限であ

ると推察できる。

これは獣王でも変わらないはずだ。いや、上限に達しているから、獣王なのか？

公式の設定通りなら、プレイヤーと行動を共にしてくれるNPCのレベルは、最大でもプレイヤーの三分の二、つまり100あたりが上限であるはずなんだ。

そう……レベルが100程度ってんなら、なんとかならない相手じゃない。

絶対防御さえ、かわしてやれば、なんとか届く。

普通にやったら、レベル70の俺の攻撃は、獣王には通じない。

だけど、なんにだって、抜け道はある。

ねえさんが、俺に罰ゲームとして、高レベルモンスターの討伐をやらせようとしていたのも、だからこそだ。

やってやれないことはない。

無茶ではあっても、無理ではない。

だから罰ゲームとして成立するんだ。

ディーナが心配している。気配でわかった。

無理だと……無茶だと、手伝おうとしてくれているのかもしれない。

だけど一度、心が折れた以上、すぐに立ち上がることは無理だろう。

（やってやるさ）

獣王へと宣言する。

「小細工させてもらうぜ？」

「その程度で覆せるものなら、やってみるが良い」

「んじゃ、遠慮なく、な」

俺は、ゴブリンの時に使った竜装備へと、チェンジした。

虎種の一撃は脅威だ。紙装甲じゃ話にならない。

獣王の攻撃は前足……手じゃねえだろ、あれはもう！

その一撃は、問答無用で、半端ない。

例え鎧が耐えられたとしても、中身の方が耐えられない。

上半身と下半身が千切れた男の姿がそれだった。

鎧が上半身ごと吹っ飛ばされた結果だった。

鎧は耐えたが、腰という関節部分は耐えられなかった。

だから、もげたんだ。

俺には、こんな重装甲で、動き回れる力があるわけじゃない。

ならこの重装備は、動きが鈍くなるだけ損だった。

しかし、それでも着ないわけにはいかないんだ。

膝の震えを止めるためには、しかたのないことだった。

竜虎という言葉がある。

それは明示されてはいない、だけど信じられているという、おかしな具合に広まっている話だった。

竜と虎は相対している。

そして竜虎との言葉通り、竜と虎の咆吼は同等で、だからこの二種の力は、拮抗、または相殺されるような形になっているんじゃないかっていうものだった。

だから、竜に対しては虎の、虎に対しては竜の装備品を身につけていると、恐慌状態のような、ステータス異常を食らいにくくなる、と口にされていた。

これについては、確実な話じゃない。そうじゃないかと噂されている程度のことだ。

公式は認めていないし、そんな隠しパラメーターがあるのかどうか、確かめられたという話もない。

そもそも話の出所は、掲示板での書き込みだった。

竜と戦う際に、虎の装備を付けていた者や、逆に、虎と戦うときに、竜装備を身につけていた者が、ステータス異常を食らいにくかった気がする……って報告したんだ。

俺も俺もと、賛同するプレイヤーの数が結構あったことから、半ば常識、定説として広められていた。

正直、これからすることを考えると、気休め程度でも助けは欲しい。

それから、武器。

竜の牙は使わない。

ショートソードだ。  
それも二本。

二刀流のスキルは、かなり珍しい部類に入る。

なんでかって、面倒だからだ、育てるのが。

スキルには、右利きと左利き、両方のスキルが設定されている。

このスキル値が高いほど、プログラムが高いクオリティで、動作の補正を行ってくれる。

現実にはなかなかできない、逆利きや、両利きを堪能させるために、作られたプログラムだった。

だけど、実際に育てるとなると、話が違ってくる。

このゲームが、ヴァーチャルリアリティであるからだ。  
スキルは、実際に使っていないと、上がらない。

つまり、両利きを実現しようと思うと、本当に逆利きの訓練をしなければならぬんだ。

もっとも、習得にかかる時間は、プログラムの補正が働くヴァーチャルの方が、リアルよりも圧倒的に早いんだけどな。

その上、練習のためには、訓練場での地味な特訓とか、格下相手とのつまらない戦いなんかを、長い時間でこなさなくちゃならない。

あげく、両利きになったからって、攻撃の手が倍になるわけじゃない。

よくて1・3倍かなあ？

右で斬りつけ、左で斬りつける。その間には、姿勢制御、重心の移動などを行わなければならないんだ。

その上、武器を連続で振り回す都合上、振り回されたりしないように、扱う武器は、自然と軽めのものになる。

つまり、最大攻撃力は、どうやったって、片手装備よりも落ちるんだ。

その上、それだけ派手に動くわけだから、スタミナの切れも早くなる。

どう考えても、お得じゃない。

戦士系にとっては、お呼びじゃない能力だ。

だって、戦士系は、相手の防御力補正を、最大攻撃力で上回って、いくらだって商売だからな。

攻撃力を上げることは考えられても、落とすなんてありえない。

もつとも、盗賊系とか、軽装備を主体にしてるプレイヤーには、重宝される能力だけど。

そして俺は、そんなスキルを身につけている。

ディーナに習得させるか悩んで、練習台として、試していたからだった。

「準備はできたか？」

獣王は、俺が決意を固めるまで、待っていていた。

「律儀にありがとよ」

「なあに、マリアの惚れた男だ。俺よりも良いとした男だ。その目の確かさを知りたいだけだ」

「？」

妙な物言いだなと思ったけど、尋ね返すほどのことでもなくて、俺たちは互いに一步を踏み出した。

「フラグ！」

良いね！

命がけの男に叫ぶ少女の声！  
そのフラグを回収してやるよ！

## 長くなったので二分割(2)

ドラゴンレジェンドは、ただのゲームじゃない。  
VRMMORPGだ。

それも、高スペックマシンを要求する、最低最悪最強の物理エンジンを搭載した、化け物ゲームだった。

「やるぞ人間！」

「フラグだ！ 獣王！」

俺たちは交差した。

体長三メートル……と書くと簡単だ。

しかし間近になると、とんでもない巨体だった。

縦に三メートル。

横に幾つだ？

見上げてても、胸筋しか見えない。

巨体で視界が埋められている。

光も陰る。

影に包まれてしまう。

そしてブオンと、俺の頭よりも大きな手が、横なぎにふるわれる。

鎧のために、俺の動きは制限される。素早さが落ちている。

だから動きは最小限にとどめるしかない。

大きい、ということは、その手がふるわれる高さも、高い位置になるということだ。



だから、わずかに身をかがめて、ふるわれた右腕をかくぐつた。そして通り抜ける際に、横つ腹の毛皮に、逆立つように刃を沿わせた。

血が流れた。

あり得ない防御力の正体が獣毛にあるなら、その下に刃を届かせれば良い。

獣毛を逆ぞりすることで、その下にある肉にまで刃を至らせれば良い。

刃に付いた赤の印象は凄いものだけど、パラメーターで見れば、結局のところダメージは1だ。

位置を入れ替え、身を捻る。

素早く動けない。動きに合わせてスタミナがガリガリと減っていく。

筋力に合っていない鎧のせいだ。  
スタミナ切れまで、あと何回避けられる？

互いに回転して、二撃目を放とうとする。

先に回り終えたのは、獣王だった。

右足を軸に、左足で地を蹴り、そのまま左腕を振るってくる。

『左』に剣を持っていた俺を、豪腕が直撃した。

フラグという、ディーナの悲鳴。

だけど、その俺は吹っ飛ぶことなく、かき消すように滅した。

その三步下がったところに、右に剣を持った俺が居る。

「<sup>ダミー</sup>幻影か！」

「 汝の身は戦いを臆す！」

防御力低下の弱体魔法を放ち、さらに下がる。

魔法耐性の低い虎種には効果<sup>「つかてきめん」</sup>覲面だ。

俺は魔法のエフェクトが収束する様を見ながら、空いた左手で、取り出したアイテムを地に撒いていた。

それは、大量の、クルミのようなものだった。

こしゃくなど、獣王が前に出ようと踏み出した。

その足がクルミを踏む。

「  
!?」

光と爆発。

<sup>フラッシュグレネード</sup>閃光爆弾に相当するアイテムだ。

威力は、使い手ではなく、『作ったプレイヤー』の能力に依存する。

俺に絡んで適用、修正される項目は、成功確率、弾けてくれるかどうかだけだ。

つまり。

「小僧おおおおおおおおおお！」

さらに逃げるように下がる俺。

獣王は二足を踏ん張り、胸を張り、両腕の拳を引いて、咆吼をあげる。

森の木々が震動する。

虎の足は血だらけになっていた。

ダメージは、1を越えている。

10までは届いていないが、十分だ。

装備を『幻夢の双剣』ツイン・ホーンテッドから、遠距離兵器に換装する。  
右の肩に担いだのは、大砲だった。

「まだまだあ！」

ドンツと、一発。

しかし飛び出したのは砲弾じゃない。

そんなものは、獣王の拳を前にすれば、碎かれるだけだろう。

そもそも、魔法による障壁が当たり前にある世界では、物理兵器なんぞ大して存在感を見せられない。

だから、飛び出したのは、投網だ。

それも、ミスリル製の。

「ケダモノにはお似合いだろう！」

「こんなもので！」

獣王は、身を包んだミスリル製の網を………引きちぎりやがった！？

さすが竜種と並ぶばけもんだな………そりゃ人間くらい挽肉になるわ。

ドンッと、下がり続けていた俺の背中が、木にぶつかった。

両手よりも横幅の太い、立派な木だった。

「しまっ！？」

逃げ場を無くす。

獣王は、にやりと笑い、身を低くした。

跳ねるために、足に力をため込んだ。

「フラグううううう！」

絶望からのディーナの声。

そうだ、俺が下がりにながって作ったこの距離。

木を背にして逃げられなくなったこの距離こそが。

潰された不正プレイヤーたちが掴まった距離。

そう。

(やつの間合いだ！)

オオオオオオオオオオオオオオ！

獣王が飛んだ。

俺は足がすくんだように腰をかがめた状態のまま……。

にやりと笑う。

「伏線は張ってたぜ？」

パイク。

俺は武器を呼び出した。

なにも持っていないかった手に、予兆もなく6メートルはある竿状の武器が現れる。

しかし、そのパイクは、俺には装備できない高等品だ。

俺は、その柄を木の根元に置き……。

「！？」

獣王の目が驚きに見開かれる。

飛びかかった獣王に、回避する術はない。

空中では、方向を変えることも許されない。

そして、穂先が獣王に触れる直前、俺は槍から手を離れた。

そうすれば、そこにあるのは、ただのパイクだ。

ただの武器だ。

武器としての命中率や、攻撃力は意味を無くすけど……。

決して折れることのない、レベル150のディーナが愛用する武器の一つ、ミスリル製のパイクは、硬く、鋭い。

十分な凶器だ。

そして必殺の獣王の動き。

その加速もまた、この罫の助けになる。

加速のついた獣王の巨体は、自分から槍へと突き刺さっていく。

獣毛がそれを拒む。

パイクが木と獣王に挟まれて、大きくしなった。

しかし、折れない。

獣王の体が、槍につつかえ、曲がり始める。

均衡は一瞬のことだった。

獣王を跳ね飛ばすだけに終わるかと思った。焦った。

しかし、ミスリル製のパイクは、獣王の腹に突き刺さった。

そして獣王の腹に穴を空けたとたん、パイクはしなりによって溜めに溜めていた力を解放し、一気に深々と貫いた。

ドン、っと……。

バランスを崩した獣王が、腹を貫かれたまま、背中から木にぶつかった。

勢いのすさまじさに、木が折れて吹っ飛んだ。

衝突した獣王は、跳ね飛ばされた格好になって、さらにその向こうへと転がっていった。

地響きを立てて横たわる。起き上がろうとして、どすんと失敗し、ぱたりと尻尾を落として、沈黙した。

その体の下に、赤い血が広がっていく。

「あんたに言ってもわかんないだろうけど」

俺は、緊張から強ばっている体にむち打って、立ち上がった。

「システムの穴を探すのが、廃人って人種なんだよ」

ヴァーチャルリアリティ。

このシステムは、加速や、荷重といったものさえも、リアルさを追求するために、数値として実装されている。

それは武器に破壊力を与えたり、速度を加味したりと、様々な効果を生んでいる。

そして武器に限らず、道具などは、文字だけの存在ではなく、ちゃんと捨てることも、置くこともできる。

つまり、罾を作れるのだ。

設置された罾は、そこに働いている物理演算の結果をエミュレートして、どの程度の効果があったのかを決定する。

ミスリル製のパイクには、魔法効果はついてない。  
だから、ディーナから、倉庫であるフラグに預けていた武器だった。

だけど、レベル150のディーナ用にとっていた武器ではあった。

それは、レベル100程度のキャラクターには、十分すぎる凶器だった。

「ふっと、獣王が血を吹いた。

「……終わってみれば、一撃も、か」



そして、ぐぐつと、無理に頭を持ち上げた。

「見事だ」

そして俺を見て、……笑いやがった。

「なんだよ」

「フラグ……」

ディーナが近寄ってくる。

俺の側に立って、怖がりながら獣王を見る。

ディーナには、不思議だったようだ。

「どうして、あの力で……」

獣毛による、絶対防御。

あの力があれば……と言いたいんだろう。

俺もそれは思った。下手すると即死の傷だ。こんな怪我を負うようなことになっても、あのスキルは使えないのか……。

獣王は語る。

「身を捻れば……と」

「……」

「槍に、ねじれを生んでやれば、と、な」

しなっている最中にねじられれば、槍は固定から弾かれ、外れた可能性があった。

それは確かにそうかもしれないけど……。

「俺は、けだものではない」

「そうか？」

「だから、技に、焦がれる」

「……………」

「あのような……、意味のわからぬことを口走る姿、力なぞ」

それに……と。

「俺は、置き去りにしたのだ」

「なに……？」

獣王の瞳が潤んでいた。

ふるえている？

怯えているのかと思う。なにに？

その瞳は、俺と、ディーナ、並ぶ二人の姿を捉え……。

「まさか」

母虎さんの言葉を思い出した。

こいつは、母虎さんたちを置いて、他の……。

「お前……！」

ああと、こいつは首肯した。

「突然、よくわからないことがわかるようになった。……そういう気がしただけかもしれない。思っただけかもしれない。だが、結局のところ、俺はリーダーとしての責務を果たさず、ここへ……」

左腕に重み、デイナーだった。

すがってきている。彼女には、なにを言ってるんだかわからないんだろう。

だけど俺には想像のつくことだった。

（管理者に乗っ取られたのか？）

不正規ユーザーを肅正するためのアバターとして、外部からコントロールされたってことなんだろうか。

もしかすると、もともと獣王の中に、そんなプログラムが組み込まれていたのかもしれないが。

と、そんなことを考えていると、ぱたりと獣王の尻尾が揺れて落ちた。

「俺は、逝く」

ゆっくりと頭を横たえ、目を閉じた。

「待てよ！」

「マリアは、頼む」

「おい！ まだ間に合うかもしれないだろ！？」

「……………」

「死ぬな！」

俺は獣王の前に膝を突いた。

刺さったままのパイクを消す。アイテムとして収容する。

抜くと臓器を余計に傷つけそうだった。だから消した。

開いた穴から、どぷりと血があふれ出す。

「フ、フラグ！」

周囲ががさがさと騒がしい。

ゴブリンだった。

その内の一匹が、木を裂いて作った粗末な槍に、俺が置き去りにしてきた男の首を刺して掲げていた。

俺はかまっていられないと、ディーナに告げた。

「なんとかしてくれ」

「なんとかって」

「なんとかだ！」

俺は、ありったけの武器をぶちまけた。

そして秘薬級の回復薬をありったけ取り出し、獣王の傷に振りかけた。

おまけに回復の君を呼び出し、獣王に付ける。

凄い勢いで回復魔法が使用される。

一秒間に五回も六回も……エフェクトが重なりすぎて光りっぱなしだ。

妖精が使える魔法が低レベルな上に、獣王が瀕死だからだろう。千に届くヒットポイントを、二桁が最高の魔法で回復させようとすれば、連続使用もしかたない。

回復の君は、MPが尽きて消えるだろうけど、獣王の腹の傷がふさがってくれば十分だ。

「たのむ、たのよ、ちくしょう……」

祈る俺の側で、ディーナがおろおろとしている。

「フ、フラグ……まだ増えるよ……」

周囲を取り巻くゴブリンの数が多すぎた。

アイテムを使って、防御結界を展開する。  
でもこの数だ、破られるのもすぐだろう。

俺は竜の牙を持って立ち上がった。

死んだプレイヤーのことよりも、NPCが死にそうになっている  
ことの方が恐ろしいなんて、どうかしてるとも思ったけど。

（NPCじゃなくて、モブでもなくて、生きてるってんだろ？）

それが異世界転生のお約束だ。

だから、プレイヤーも、NPCも、平等だ。

基準を作るなら、どっちが身内に近いかな。

俺は知らないプレイヤーよりも、親近感のわくこいつを取る！

「母虎さんや、子虎残して、逝くんじゃねえよ！」

牙をゴブリンへ突きつける。

「もともと、お前らが俺の狙いだ！ かかってこいやあ！」

俺は怒声を張り上げ、<sup>ハイト</sup>気を引いた。

けれど、俺につられたのはゴブリンじゃなくて……。

多くの雌の虎種たちが、森の奥から飛び出してきた。

長くなったので二分割(2)(後書き)

このお話の大半はみなさまの注意により誤字脱字が修正されています(、(、ありがとうございます)



タイトル詐欺（二日目じゃねーじゃん！）

ゴブリンが吹っ飛んだ。

いやもう、そう表現する以外になかった。

俺たちを取り囲んで、興奮していたゴブリン共が、ぼんぼんと空中に跳ね上がっていく。

雌虎さんたちの第一陣による突貫だった。

四つ足で、加速をつけたまま突入し、ゴブリンを跳ね飛ばして駆け去って行った。

第二陣は、飛んできた。

跳躍し、押し倒し、引き倒し、押し潰し、噛みつき、砕き、殴り飛ばした。

その一撃ごとに、ゴブリンの肌が裂け、部位が吹っ飛び、体ごと跳ねた。

一方的な蹂躪だった。

なんだこれ？

「つえー……」

やがてその動きは、俺たちと獣王を守る結界を中心として、渦を

巻くように回り始めた。

そうやって、外側から内側へと、ゴブリンを屠<sup>ほふ</sup>っていく。

ゴブリンは外周を押さえられて、逃げ場をなくしていた。  
雌虎たちの目に怒りが見える。

一匹も逃がさないつもりなのがよくわかる。

この一方的な殺戮は、ゴブリンが全滅するまで続けられた。

……虎って、雄のテリトリーの中にいるけど、その中にも自分たちのテリトリーを持ってて、そこは自分で守ってるんだよな。

弱いわけがないわけで……。

怖かったです（　、　）、

「ふーっはっはっは！　圧倒的じゃないか、我が群<sup>ぐん</sup>は！」

ん？　なんかどつかでこの台詞、聞いた覚えがあるな……まあいいや。

あれから一週間たちました。

目前では小虎の集団が、「わー！」って感じで、コボルドたちを追いかけている。

場所は獣王のテリトリーだった森の中です。

コボルドは、犬っぽくキツネっぽい頭を持った妖魔で、人よりも貧相で小柄な感じだ。

小狡い印象が強く、実際ずるっこい。

小型の剣と防具は、どこからか盗んできたか、死体を剥いだものだろうな。

魔法を使うほど頭は良くないけど、道具を扱うくらいには器用だし、コボルド同士なら通じる言葉をもってるくらいには、かしこかったりもする。

小虎たちと大きさはほぼ一緒。

良い遊び相手だろう。

……必死のコボルドたちには悪いけど。

楽しげに遊んでいる小虎たちを眺めていると、その内の一匹が、追っていたのとは違うコボルドに足を引っかけられて転がった。

茂みに隠れていたやつが、仲間が通り過ぎるのを待って、棒を伸ばして引っかけたんだ。

うむ、まだまだだな。

なんてえらそうに、胸の前に腕を組んでふんぞり返ってみる。

ディーナの時には、さりげなく胸を乗っけるみたいにして、強調してみただけど、男だとむなしいなあ……。

コボルドが使ったのは罨だ。でも、俺が獣王に使った罨とは違う。

俺はあの時、バイクから手を離していた。つまり、罨は純粹にそれ単体での発動状態になっていた。

もし俺がパイクを支持したままだったら、獣王は俺ってプレイヤーキャラに対する防御、回避補正を適用し、罾を回避していたかもしれない。

公式じゃ、あんな即席の罾の作り方なんてものは、公開してない。

これはプレイヤー有志で、「こっだけシステムが凝ってるなら、やれるんじゃない？」と、実験して編み出していったものだった。

実際、これは大きな武器になった。強大な敵は堅いだけじゃなく、とにかく攻撃が当たらない。

だから、回避補正を無効にできる、罾を使って戦ったわけだ。

ヘイトを稼げば、敵は集中して突進してくるようになる。

それを利用し、はめるわけだ。

そして戦っている最中には、計算式の中に組み込まれる回避補正も、罾が相手だと適用されない。

つまり、NPC / モンスターとしての、AIの反応速度のみで、回避の合否が行われることになる。

しかし、AIには、そこにあるものがただのオブジェクトなのか、罾なのか、判別できる能力がない。

結果、ハメ放題の図式が出来上がっていた。

まあ、いずれは修正が入るだろうと、みんなが思っていた。

けれど、予想外に、公式はこれをアリだと認めてくれた。

まさに、知恵と勇気を動員した戦いになるし、実際に、モンスターが物体を罾だと認知できるのかどうかという、問題があったからだ。

おかげで、各上の相手とも戦えるという楽しさが生まれていた。

周到に準備をして、格上のモンスターを狩れば、一気にレベルを上げることができる。

地道に敵を倒して経験値を稼いでいても、まあ、かかる時間は似たようなものだったけど……。

ルーチンワークをこなすよりは、よっぽど楽しい時間だったよ。

仲間を募り、罾のための資金提供を呼びかけて、モンスターの狩り場を決めて……。

罾を設置して、モンスターを誘導して、はめて、それからみんなで、わーっとかかってて。

それはVR以前のMMORPGじゃ味わえない楽しさだった。

もっとも、ドラゴンレジェンドの仕様があって、はじめてできることだったのかもしれないかったけど。

楽しかったなあ……。

「……………」

ディーナがじーつと見ている。いかん、現実逃避もここまでか。

一応虎種なんだから、コボルドが持った道具による罾は、回避補正で避けて欲しい。

前転気味に転がされた小虎は、そのまま一回転して、またわーっ  
と追っていく。

四つ足になっちゃってるよ。

その手足には鉄製の爪のついた武器がはめられていた。バグナウだ。手っ甲から鋼の爪が三本から四本伸びていて、引っ掻くように敵を斬る武器である。

ただ、獣人のように、よほど筋力に恵まれてないと、切ったときの抵抗で、逆に手首を痛めかねない。

もともと手と爪で戦う虎種には、爪の延長、強化って感じで、実にぴったりの武器だった。

母虎さん　マリアさんの子供の子虎は、俺の首んどこに乗っかり、「おー！」っと仲間の様子を眺めて興奮していた。

ふんふんと鼻を鳴らして、うずうずと体を揺らしている。ただだめだぞお、お前雌だから。これ、雄ツ子の訓練だからな！。

でも油断したら行っちゃいそうだから、肩にある足はつかんぞ。

小虎は合わせて十六匹。なんでこんな引率まがいのことになるのかと言うと、獣王が出奔して、母虎さんを含んだ雌虎さんたち総勢十一匹と子供たちの面倒をおしつけられてしまったからだった。

……どうしてこうなった？

「助かった、というべきなのか」

回復した獣王は、苦笑いを浮かべていた。

座り込み、周囲に立つ雌虎さんたちを見上げて、彼女たちの表情

に、ふんと鼻息を吹いた。それから俺を見て、後は頼むと、突然言い出したんだ。

「なにを頼むんだよ」

「俺は負けた。雄に負けた。ならばテリトリーは譲らねばならん」

「いらねっつの」

「こいつらが認めん」

「お前が旦那だろ」

「こいつらも、お前の女モになった」

「マジデ!? いってえ!」

ディーナに尻をつねられた!

「なにすんだよ!?!」

ふんってそっぽ向かれた。なに?

「俺の……って言ったくせに」

「なんか言っただか?」

ぶいって、とうとう背中向けられちったよ。なんだよ?

そんなことをやってる間に、獣王は立ち上がっていた。

「では、な」

「どこに行くんだよ？」

「さてな……また、俺のものにできる場所を探す……それだけだ」

虎つてのは、そういう生き物なんだろうけど……ふと、嫌な想像がわき上がった。

（そうやって、放浪して、別の場所にまたコロニーを作って、ゴブリンに襲われて……このイベントを繰り返すってのか？）

俺たちユーザー、プレイヤーのために、と。

そうは思いたくはなかった。ここはゲームの世界じゃないと思うから。

だけど、ゲーム的なあのアナウンスが、耳について離れない。獣王の口から流されていたメッセージについてもだ。

あんまり、獣王の背中に哀愁が漂っていたものだから……呼び止めることもできずに、見送ってしまつて。

俺は、獣王が見えなくなつてから、はっと、雌虎さんたちのことを思い出した。

「あんたたちっ、どうすんの！？」

なんだか赤くなつてもじもじとされました。



「マジデ？」

こっくりと頷かれた俺の脳裏に、ねえさんの言葉が反響した。

獣姦もよ、もよ、もよー！

そんなわけです、はい。

「ヘンタイ」

ぼそつとディーナ。

「ちやうよ！？ ヘンタイちやうよ！？」

「母虎さんと寝てた」

「ちやうからね！？ 子虎が寂しがるから母虎さんと一緒に寝てあげただけだからね！？」

「母虎さんの胸にむねむねしてた」

「だってディーナより大きくてふっくらしててやわらかそうだったんだもん！」

ぶつとばされました。

「ばかぁ！」

怒り肩で帰ってっちゃったよ。

びっくりした小虎たちが、全身の毛を立ててふっくらしてる。

おーおー、怖かったよなあ……コボルドたちはその間に逃げた。

別に依頼を受けてきてるわけじゃないから良いんだけど、こいつらが一人前になってくれないと、獣王の持ってたテリトリーが、他の虎種に取られる可能性があるからなあ……。

「俺はけだものじゃねーから、テリトリーとか守ってられんし」

はあーあと、ため息をこぼして、今日は帰るぞーっと集合させた。

「へたれ」

「うぐうー！」

「YOU！ やっちやいナYO！」

「いやいやいや、ないですから！」

酒場である。

ねえさん呼び出し、相談中だ。

「んで、雌虎さんたちは？」

「とりあず、ギルドに登録して、宿場に宿を持ってもらいました」

「登録できるんだ」

「その辺、ゲームじゃないってことなんでしょうね」

「ん〜〜〜？ それも含めてイベントだったり？」

「まさか……」

「あるいは……群れのリーダーってことで、全員があんたの戦力扱いだとか？」

「なにそれ俺が怖い！」

「あ、あと、虎って、確か別の群れに合流するとき、前の旦那の子って殺しちゃったりとか」

走り出そうとしたらすっころばされた。

「無詠唱で捕縛呪文とかかけないで！」

「あんたその台詞マクロで登録してるでしょ」

「いつものことですから」

「手えぬくな。あと冗談だから。モチツケ」

とりあえず座り直した。

「まあ小虎たちも懐いてくれるし、雌虎さんたちも落ち着いてるし、お金もあるし、特に問題は見当たらないんですけどねえ」

もちろん俺がパトロン役です。

「お金かぁ」

「ねえさん？」

「ため込んでたのと、同じだけの額のお金があんのよねえ」

ああ、そのことかと納得した。

プレイ中に、お金はしこたま貯め込んでいた。

なんとこつちの世界でも、その額が維持されていたわけだ。

雌虎さんと小虎たちの生活費……養育費……飼育費？ は、そこから出してる。

「ぶつちやけ、仕事する必要がありませんよねえ」

「まったくねえ……」

おそろくだけど、俺と姉さん、二人の所持金を合わせれば、街どころが国が買えるくらいの額になると思う。

俺たちがやり取りする武器や防具つてのは、それでも足りないくらいに高額なものがいくらかもある。

だから、ため込んではいただけ……。

「ねえさん、競売とか覗きました？」

「ろくなのがないのよ。前はそうでもなかったみたいだから、お仲間が引つ込めたんじゃないかって思ってるんだけど」

俺たちのような連中が、手元に残すことを選んだってことか。そりゃそうだよな。ゲームだから、死んでも復活できるから、だから旅や冒険に出られたんだ。

命がけとなると、そんな勇氣はわき起こらない。

その上、一生不自由なく生きていけるくらいのお金があるなら、引きこもったって良いんだろう。

「あんたの話だと、リアルマネートレードRMTやってた連中の動きとかも気になるし」

「潜伏とか闇組織作りですか？　そこまですましかねえ？」

「不正ログインはともかく、RMTはこの世界じゃ無関係の、あつちでの行為でしょ？　んでもって、RMTやってた連中は所持金やアイテムを、全部リアルのお金に換えてたわけださ」

「こつちでは、ろくな装備も、金も持ってない？」

「だから……つてのが怖いんだけど……。RMTに出せるような、レア装備を集められる高レベルプレイヤーではあるわけだしね」

でも、だからこそって思うんだけどなあ……。

「この世界、ゴブリン退治をやってるだけでも、食っていけるんですけどねえ」

好きこのんで闇組織とか作るのかなあ？　って思うんだけど。

「そこは、あんたにぴったりの世界よねえ」

くくくと笑う。

これは別に皮肉じゃなかった。俺が前からそう言ってただけの話だ。

だって、そうだろう？　人の顔色うかがったり、一生懸命コミュニケーションを取らなくなったって、ぶんぶん剣を振ってれば、食って寝て、遊んでいられる。

良い世界じゃないか。

獣王のことを思うと、微妙だけどさ………そういやゴブマン、どうなったんだろ？

「ねえさんは、これからどうするんすか？」

「ん~~~~？　とりあえず王都に行ってみるわ」

「王都に？」

「うん。あたしの設定が生きてるなら、城の中でも自由に歩き回れるだろうしね」

城がらみのクエストなら俺もクリアしてるしなあ……。

「てかなにしに行くんすか？」

「暇だから？」

「……………」

「だってやることないんだもん。暇つぶしくらいは見つけないかね」

そんなことを言いながら、くびくびと酒に口を付ける。

初めての酒……一応、俺が無事に帰ってきたお祝いらしい。

自分で地獄にやっておいて……。

そんなわけで、ねえさんに付き合い、つきあい……突きあいはしませんでした、はい、いちおうあの人、リアル幼女なんです。

送り狼にならずに送ってきましたよ。

いまその帰り。

夜風が酔った体に気持ち良い。

酔った姉さんは色っぽかった。

ついでに無防備すぎるし胸でけー。

中身は子供でも外見は大人なんだよなー。

もみもみしたかった……したらきつと、自動起動した護衛精霊が魔獣に瞬殺されてただらうけどさ。

でもなー、あの人、この世界じゃ、一応は大人なんだよなあ……。ねえさんも、いつかは誰かとしちゃうのかなあー。

……いかん、その歳で初めて？　なんて言われて極大魔法を唱え始めるねえさんの姿が思い浮かんだ。

あの人が組んだ魔法はパネエからなあ……。あんまり酷すぎて地形破壊起こしてポリゴン壊れてポリゴンの裏側の世界に全員が落とされて『ハヴォック神』なんて異名ももらったくらいだし。

ハヴォック神がなにかはググってくれ。

ちなみにその魔法は、運営から不許可出ました。

……運営から泣いて頼まれるユーザーってなによ。

そんな具合に、良い感じでふらふらと……。俺もだいたい酔っていた。

「ただいまあ~~~~」

……って、もう遅いか。みんな寝ちゃってるし。

宿の中は静かなもんで、しーんと静まりかえってた。

「ディーナ……」

……は、だめだ、起きてる、怖い。

寝てるふりしてる背中からオーラが立ち上ってる。



こそこそと避けよう……。

なんだこの流れ。俺は駄目亭主か。

母虎さんとは……雌虎さんたちにはそれぞれの宿だけど、子虎が俺から離れないんで、母虎さんだけは、俺んここに泊まってもらうことになったんだ。

あ~~~~、だめだな、子虎と良い感じに眠ってら。

しょうがねえ、台所で寝るか。

い、椅子があるから、ベッドなんていらないんだからね！

というわけで、ごとごとと一人がけの椅子を並べて寝床を作る。

横になる前に……もうちょっとだけいっとくか。

床下の収納庫から酒瓶を……お、これは？

俺は、おおおお！　っと、それを掲げて広げてしまった。

「H本！　いやアダルト本！　いやよりここは格調高く、エロ本と呼ぼう！」

えっろ本、えっろ本っと、高々と掲げて踊ってしまった。

ごめんなさい、酔ってたんです。

酒もある。寝床もある。エロ本まである。

「ここがパラダイスか」

それじゃあと、振り向いたら……。

「それで？ あんたはそんな本持つて、なにするの？」

半眼のディーナと、子虎を抱いた母虎さんがいました。

「……そろぶれいw」

蹴りレベル255の股間蹴りをもらいました。

……最後の一撃は、せつない（T^T）

て、てこ入れなんかじゃないんだからね！

「無限に広がる大宇宙、か……」

「殺意のわく言葉ですよねえ……とくに漂流中だと」

「まったくだ」

彼が漂っているのは、銀河と銀河の狭間にある空間であつた。

宇宙戦争も亜光速があたりまえとなると、一戦闘領域も銀河規模へと拡大し、ドッグファイトに夢中になれば、指標のない空間へ飛び出してしまふこともしばしばであつた。

迷子の誕生である。

外から見る銀河の群れは数多く、自分がどの銀河からやってきたのか、わかるものではなかつた。

意外と多くの電波は拾えるので、その中からあたりをつけて、あとはコールドスリープを併用すれば、運が良ければ戻れるかもしれない。

ただし、戻つたときには数百年、数千年、数万年が平然と過ぎていて、戦闘は終結し、別の区域　銀河へと、戦域が移動している可能性があつた。

戦闘自体が、光速を越えているために、他の艦船とは時間の流れが違つてしまつている。

そのため、普通に戦闘をしていても、母艦へと補給に帰還すれば、

船の中は世代を交代していた……ということもよくあった。

あちこちで、違った時間の流れの中で戦うことになるため、それを修正するような無駄な行為は排されていた。

現在では、言葉が通じて、倫理や道德観がかけ離れないように、電子精霊、電子妖精によって、適宜修正が行われている。

だから、戻ったときに、もう知った顔に会えない……ということとは、日常的なもののなので、特に悩むようなことでもなく、彼らとしては、元の戦域へ帰還するか、それとも生存可能な領域へ避難するべきか、そのことだけが議題として上がっていた。

彼らもまた、戦いに身を置く者だった。

宇宙戦争とは言え、巨大な陣営があるわけではない。利害の不一致によって起こる小競り合いが、拡大しているだけであつた。

狩る者と狩られる者に別れ、かすめ取る者や邪魔者などが現れる結果、何十という軍団が入り乱れ、混戦を究める結果となる。

彼は、そんな軍団の一つに、自分を売り込んだ傭兵だった。

ただしくは、自分の作った船の威力を見せつけるために、参戦した者だった。

正面からは菱形、上方からは、前方に長い二等辺三角形、後方に短い二等辺三角形をくつつけた形をした、白亜の船だった。

左右には本体を小型化した艦を接続し、補助艦……というよりも、翼のように扱っている。

その翼の後部からは、青い炎が伸びていた。ジェットではない、不可思議なエネルギーだった。

「無限加速って、無理合つたかなあ」

「一瞬ですつとびましたもんねえ」

補助艦は前方の空間密度を操作し、薄くする。

この結果、艦全体が前に吸われ、引つ張られ、加速する。

後方に流れる光は、破壊された空間の残滓であった。

「どうするかなあ」

「艦内の農場は稼働していますから、百年は大丈夫ですよ？」  
ファクトリー

コクピットシートに座る男性の年齢は二十歳ほどだった。

その右手、肩の辺りに、ふわりと女性が浮いている。

十代前半とも、二十代後半とも思える不思議な女性だった。透けている。

顔が幼く、髪は長く、ふわつとふくらみ、その体は細身ながら、触れたいくなるような柔らかな量感を持っていた。

だが決して触れることはできない。

彼女は艦の電子精霊　ホログラフィックであった。

「俺の寿命の方が先に尽きるわ」

「ですよー」

口元に右手の甲を当てて、こころごと笑う。

「じゃあ子供でも作ります？」

「なにが悲しくてダッチワイフ相手にクローン作らなきゃならんだ」

「ちゃんと中に入れてあげるのに」

「勘弁してくれ……」

パイロットが人間である以上、生理的欲求の存在は避けられないが、男、レイドはその手のことが苦手なのか、恥ずかしいのか、焦った様子で彼女を落ち着けた。

電子妖精は、絶対にパイロットを嫌うことがない。

そのようにプログラムされているからである。

でなければ、命のやり取りをする場所で、パートナーとして信頼することはできない。

彼女、シルフィードもまた、そんなプログラムがインストールされているという前提の元で、成長、育成、変化してきた、まさに理想のパートナーであった。

ただし、本来の持ち主にとっての、である。

この艦<sup>シルフィード</sup>が完成する直前に、艦の強奪事件が起こりかけた。その際に、本来のパイロットが死亡し、設計、建造にあたっていたレイドが、シルフィードのパイロットとして、登録を行ったのだ。

このために、シルフィードは親友の恋人、幼馴染だった人、そのような、友人的な感覚の存在として、性格付けが行われてしまっ

ていた。

「で、だ」

レイドは、目の前をふよふよと仰向けに漂いながら、複数の投影型ウィンドウを操作している彼女を眺めた。

「それだけ落ち着いてるってことは、なにかあるんだろ？」

「なにかってほど、良い話でもないんですけど」

はいつと、ウィンドウの一つを押して流す。

その電子表示を受け取って、レイドはページを繰っていった。

「救難信号？」

「何千……何万年前のものかわかりませんが、億年単位じゃないですね」

「これが良い話か？」

「運が良ければ、この人たちの子孫が、居住可能惑星で、文明を築いていると思います」

「滅んでなければ……ってことだろ？」

「ひとりぼっちよりは良いんじゃないかと」

移民船団や商船、娯楽使節団など、銀河間を航行し、行方不明になっっている例は数多い。

どれだけ注意したところで、運が悪ければ光速近くまで加速した岩塊に貫かれることだってある。あるいは、空間の歪みに飲み込まれることもだ。

そんな状態でも、帰還が難しいとなれば、手短な星を見つけ……それが居住可能惑星ならなお良いが、場合によっては惑星改造を行い、星に根付いて生涯を終えようと、彼らは前向きに散っていった。これらの子孫が、遙かな後に発見されると言うことは、珍しくなかった。

シルフィードが見つけたのは、そのような者たちが、大昔に発信したのであるう信号であった。

「ま、行く当てもないし、行ってみるか？」

「と、いうか、もう、向けちゃってますけどね？」

勝手にしてくれと、レイドは肩をすくめ、そのままシートの機能を立ち上げて、スリープモードへ移行した。

次に目覚めたとき、彼は大気圏を自由落下中という、燃え尽きる直前の状態になっていた。

……そしてその頃、彼らが向かう先で、主人公は。

「デイナーさんは怒ってクエストに。家主の居ない家で母虎さんに食べられちゃうのはまずいと思った俺は、旅に出ることになったのでした」



「誰に言ってるの？」

突っ込みはねえさんです。

「食っちゃえばいいじゃないの」

「<sup>ヘタレ</sup>オタクを舐めないでよね！」

臆病な生き物なんです。

俺たちはいま、見渡す限りの平原を歩いてます。  
おお、ギガンディアスよ、いつの日か。

「テレポートで即帰還だけどねー」

「情緒がない！」

「子虎にコトランって名付けたあんたよりマシ！」

コトランちゃんは、エリマキトカゲっぽい体長一メートルくらいの  
のなにかを追いかけて行っちゃいました。

「行かないで〜〜〜！」

母虎さんに殺されるから〜〜〜！

しかも速ええよ！ あつという間に見えなくなったんだよ！

気がついたら俺の荷物がもっこりしてて、コトラン押し込んだのは  
母虎さんらしかったです。

母虎さん、どういっつもりで……。

だがしかし、わかってることが一つだけ……。

コトランになにかあったら、俺、きっと狩られる……。

そんなガクブル状態で、俺は現在、迷子のコトラン搜索中です。

科学と魔術が交差するとき、大惨事が起こりそうです。

非常事態につき、スリープモードを解除します。

目覚めたとき、コクピットは激震に襲われていた。

「シルフィード！」

「警告します。次元跳躍後、未登録惑星の重力圏につかまりました。現在降下中です」

「どうして離脱できない！？」

「惑星全体が未知のフィールドによって覆われています。バリアと思われます」

「ぶつかったのか！？」

「突破時にシステムの一部がオーバーロードを起こしました。現在冷却中。復帰まで1860時間」

「フォトンブラスター！」

「レベルは」

「最低出力だ！ 大気に穴を開ける程度で良い！ 突破口を作る！」

「撃ちます」

艦両脇の副船は、減速のために前後の向きを変えていた。逆噴射を停止。ぐるりと回転し、向きを正すと、先端部に発光体を形成する。

空に大気を切り裂く光が放たれる。

発光体が大気を貫き遠く走った。

コクピット内の、摩擦により赤くなっていた景色が、青と黒に落ち着いた。

ブラスターによって大気が消失し、数秒の間ではあっても、宇宙と同じ無の空間が誕生していた。

手に入れたわずかな時間を制御に費やす。

機首を上げ、船の腹を落下方向へと修正する。

摩擦対策のために、船首に張っていたバリアを、艦底部に集中させ、船体の巨大さによる抵抗を利用し、減速をかける。

「間に合うか!？」

「成層圏を抜けます」

「スラスターっ、バーニアも！ 逆噴射っ、全力だ！」

「了解」

副船が回転、後部を下、やや前方へ向ける。

大気圏内航行用の推進剤に火を付ける。

同時に、艦下方全体で、複数の小型シャッターが開かれた。こちらからもジェットが火を吹く。

雲海を踏み抜き、突き抜け、それでも落ちる。

「足りません」

「ガジェット放出！」

副船の外側が開き、小型の尖塔型機械が5つ射出される。

それは船の下方に1つ、船の前後左右に4つ位置し、それぞれが光のラインで繋がれた。

そして四角錐のバリアを形成する。

「ショックアブソーバ全開！」

「イナーシャルキャンセラー全開。吸収しきれません。備えてください」

「ぐう！」

内蔵が口からまるごとこぼれようとした。

眼球が飛び出し、血が溢れようとした。

非常事態と判断した機能が、コクピットをジェルで満たす。

地表はもう、目前だった。

「警告。落下地点付近に生命体反応複数。内、知的生命体と判断できるものが2から3。不時着の衝撃波に巻き込みます」

「なんとっ……かつ！」

「無理です。落ちます」

「くっそがぁあああああああ！」

その日、誰もが空を見上げた。

「星が落ちてくる……」

とある国のとある姫が、王城のベランダから祈っていた。

空を青い光が貫き、それを追うように、光の玉が落ちていく。

それは貫かれた大気が起こした屈折現象と、墜落中の船の姿でしかないのだが、彼女には、空を駆ける天使と、それを追う魔物の姿のように捉えられた。

一方で、のんきなやつらがここにいた。

「つかまえたあ！」

じたばたと暴れるコトラン……いやもっと可愛く、「こつらんと呼んでやろう！」

こつらんを背後から抱き上げる。

うーっと唸ってもだめ！ 取らないから！ その口にくわえてるの取らないから！ むしろ触りたくないくらいだから！

なんかびちびち跳ねてるけど！ トカゲの尻尾っぱいけど！ やたら太くて長くて気持ち悪いし！

背丈の高い草の原っぱから、虎尾だけひょこんと立たせて、ゆらゆら揺らしてると思ったら。

トカゲっぱいやつが逃げようとするのを、びたっ！ びたっ！  
って、手で押さえて遊んでただけども！

獣王と母虎さんからなんでこんな野生児が……野生児っていうか本能まんまだなこいつ。

「おーい」

「ねえさん」

「なんか落ちてくるみたいよー」

「え？」

空を見上げると。

「なんだあれ？」

「隕石じゃない？」

「誰かメテオストライクでも使ったのかな？」

「あれ、国が滅ぶレベルよ？」

「てか、マジデこっちに来てないッスか？」

「うん……みたいね」

平気じゃないです。

二人ともすっげー冷や汗かいてます。

ことらんだだけ、手えのばしてわきやわきや動いてます。  
だめだからね！ あんなの抱っこできないからね！

「えっと……逃げます？」

「間に合わないんじゃない？」

「ですよー」

テレポート系の魔法や道具もありますが、使用開始から効果発動まで、三十秒以上必要になるんです。

あはははっと、笑っていると、ねえさんが、ぱっとマントをひるがえした。

ちえー、ぱんつ履いてらー。

「あんたあとでお仕置き」

「なんでばれたし！？」

「ログさんしよー」



「しまった！ 設定いじってなかった!?」

全部を一旦ログ化するのはやめて欲しい！

どうも、言葉はメッセージウィンドウを経由して発信されてるらしいんだ。

思考がメッセージウィンドウにテキストを打ち出す。

そのテキストはこの世界の言語として、自動翻訳されてから、外へと発信されている。

逆に、外の言葉は、こっちの言葉として翻訳されてウィンドウに表示され、俺の頭に入ってくる。

これがあるから、通じてる。

虎種みたいに、明らかに人間と違う舌と喉を持つてる人種が相手でも、このシステムを経由しているから、会話が成立しているみたいだった。

今のところ、俺とねえさんだけしか、メッセージウィンドウの存在に気付いてないから、プレイヤーでないと、わかってないことなのかもしれないけどさ。

問題は、さっきも言った、設定だ。

たとえば、普通の会話として話す「SAY」、無制限に叫ぶ「SHOUT」、特定の相手だけに語りかける「TALK」、メモ的に使う「SOLILOQUY」、これらが俺の思考として、ログには流れてるんだけど……。

デフォルトで、独り言がフリーでダダ漏れにされてるのは、「聞こえてるからw」「口に出てるからw」という、お約束のためだった。日本文化に特化しすぎだろう、このゲーム。

最初は全部の機能がオンになっていきますので、必要なものはオフってくださいとか、どっかのOSか、このゲームは。

というわけで、SOLEILOQUYを、人から見えないようにオフとく。

これでねえさんのメッセーシウインドウには流れなくなっただけだった。

……てか、ディーナや他の連中には、考えがばれてなかったし、基本的には、口に出てる言葉以外、伝わってないはずなんだよな？  
じゃあ、ねえさんは、メッセ見ながら会話もしてるのかな？ 俺はそこまで器用じゃないから、必要なときだけ見てるんだけど。

そんなことを考えてる間にも、ねえさんの準備は整っていた。

やったらでかい魔法を構築してたらしい。結構時間がかかったな。

前にも言ったけど、魔法はイメージーションによって形成される。

ドラゴンレジェンドの場合は、属性、威力、範囲……他、様々な要素を選択していく形式だ。

思考整理型のエディターというものがある。カードを作り、それをラインで繋げ、関係性を見直していくエディターだ。

ドラゴンレジェンドの魔法は、これと似たものによって、プレイヤーが個々に魔法を編み出していく形式だった。

呪文や呪言、いろんな形でインスピレーションカードを獲得し、それを繋げていく。もちろん、繋がっている順番に魔力が流れて、魔法が形成されていくので、おかしい順に並べていると、思わぬ作用が引き起こされたり、なにも起きなかったりと言うことになる。

我らがハヴォック神様は、この魔法の天才だった。即興で、シス

テムの穴を突く……バグが引き起こされるような形で、魔法陣を組み上げてしまうんだ。

……うん、普通は順にカードを並べてつなげてく位なんだけどね。この人、なんか円になっちゃうんだよ、頭と最後が繋がっちゃうんだ……。

んでもって、破綻することなく、スタートから終了まで連結されたカードは、効果を延々と増大させながら循環させて、無限に威力を高めていって……。

結果、極大と呼ばれる魔法が、行使されることとなります。

「ハヴオック神がお怒りじゃあああああああああ!？」

「……………」

「いやああああ! こっちに向けないで! ことらんを巻き込まないでえええええええ!」

ええ、盾にしますとも。非常時です。みんな自分の命が大事です。最低とか言わないでください。こらっ、ことらん! 暴れて逃げようとするな!

本能的に、危機がわかるようです……っというか、ケダモノ的にも、空から降ってくるもんより、ねえさんの方が怖いんかい……。

「あんた、やっぱり後でしめる」

そう言って、ねえさんは空に向かって魔法を放とうとした。

「どらぐすれ……」

「ねえさんそれやばいからー!」

いやだつて、ほら、このゲーム、自分で魔法作れるからさ、自分で魔法に名前付けて、人に式を呪文書、魔法書として売りつけたり、固有呪文として隠したりとかできるからさ。

そこに厨二病患者と、オタクが居れば……あとはどうなるかわかるよな？

とにかく、ねえさんの指先から発射された赤い閃光が、空から落ちてくるものに直撃した。

ちなみにこの魔法も、運営から禁呪とされた魔法です。  
人に売ったり教えたら、アカウント削除だそうです。

運営……必死だったな。

主人公はそうでもありませんが、ねえさんはチート組です。

落下まで二十秒。

「！？ 高エネルギー反応っ、来ます！」

「なに！？」

直後、レイドは耐G仕様のジェルに満たされたコクピットの中を、それでも投げ出される勢いで衝撃を受けた。

「むううううううう！」

ねえさんが唸る。

術式の円環を、魔力が循環し、魔法が限界にまで熟成される。臨界点は、ねえさんの精神力次第だ。集中力の途切れ目が、コントロールの失敗を左右する。

だから、放たれた魔法は、間違いなくねえさんにとっての最大威力に達していた。

「弱かった？」

魔法の効果時間と、破壊力は、術式を組んだ時点で決定されている。

だから、発射後に気合いを入れてみたところで、威力を引き上げ

ることは不可能だ。

となれば、ドラグ レイブを選んだねえさんの失敗だと言うことになる。

地表に放てば、一面がぶっ飛び、焼け野原どころか、灼熱の溶岩地獄が形成される魔法なんだけど、落ちてくるやつは、バリアっぽいのを張っていた。

平面を組み合わせたような形状をしていて、それがねえさんの放ったビームを弾いている。

「なんだあれ……隕石じゃない……」

俺は、ことらんを抱き上げたまま、呆然としていた。

バリアは角度がついていて、受け流すような感じだったが、弾かれたビームは幾状にも別れて、散っていった。

障壁とか結界って言葉じゃ、違和感を感じる。

あれは絶対、バリアだ。

かけー！

艦底部に張った四角錐のバリアは、墜落時の衝撃を緩和するために用意したものだった。

決して地上からの攻撃を想定していたものでは無かった。

それだけに、消耗されるエネルギーが追いつかず、出力が姿勢制

御へと回しているエンジンから奪われていく。

「対空施設でもあるのか!？」

「いえ、人です。発射を確認、撃つたのは人間です」

「ばか言え!？ 大気中で減衰されてるって言っても、人間が持てる携行火器程度で……」

「……素手からビーム出してます」

「この星の人間は化け物か!？」

バリアは貫通されようとしていた。

「対艦砲並じゃないか!」

「確認する時間はありません。バリア角を調整。ビームを真つ正面から受けます」

「なんでっ、余計に……そうか! ビーム圧の抵抗をともに受けて、減速する気か!？ だが持たなければ、貫かれるぞ!」

「やるしかありません。接地まで10」

……なんかバリアが盾みたいになって、ねえさんの魔法を受け流さずに受けとめたした。

「なんか必死っぽいんですけど……ねえさんの魔法は、宇宙船でも耐えられるのか」

ねえさんは渋い顔つきになってた。

「違う。防御態勢じゃない。あいつ、こっちの力を利用して、押し戻されるつもりだわ」

「え？」

「減速しようとしてるってこと。速度を落とすためのつかい棒代わりにされてる。あたしの魔法」

よくわかるなあ。

「え？ てことはあれ……墜落中？」

灼熱の落下物……でけえよ。

こついうのも、なんとかが七分に空が三分とか言うのかなあ。相当高いところにあるはずなのに、もう視界を埋めてくれてる。尖った艦首から炎が渦を巻いて後方へ流れてる。

ぼーっと眺めてたら、ねえさんに叱られた。

「フラグ！ 防御魔法！ 衝撃波が来る！」

「へい！」

瞬時に換装。白いローブ姿になる俺。



そして指輪なんかのアイテムをじゃらじゃらと装着する。

どれもMPの最大値を引き上げるアイテムだ。

ことらは相変わらず、背中から両脇に腕を回して抱き上げたまま。ほんと、この状態でも着替えられるって、どうやって成り立ってるんだろっな……。

ともかく、これだけ極端な装備をしても、ねえさんには及ばない。魔法職の中でも、極大魔法が使えるくらいに、極振りでカンストさせてるねえさんは、特別な存在だ。チートタイプ

こっちは、普通に編んだ魔法を使うので、精一杯。

威力を増す、ということは、それだけ、術式が複雑になり、制御のための精神力が、必要になる。

何百メートル……キロはないと思うけど、十メートル単位じゃ明らかに足りないっぽい宇宙船を、跡形もなく消失させられるような魔法を使うには、ねえさんくらいに極端な育て方をしてないと、どうしようもないだろう。

……普段、下が素っ裸なのって……さっきちょっと見えたのは、なんか白のチューブっぽいので胸隠して、下も白のパンツはいてて、その上から胸の下までもないような黒の皮のジャケットに、前の空いてるショーツパンツとブーツで、アラサーのちょっとぽっこりとした下腹部がパンツの際に乗ってて、良い感じに太くなってる足が、えらいエロかったけど……。

それ、普通のカジュアルですよね？

まさか、筋力不足で、まともな装備品を身につけられない……とか？

ローブだけで必要筋力<sup>STR</sup>使い切ってるとか……ありえるな。

まあ、そんなことを考えつつも、魔法はちゃんと展開しました。いわゆる一つの絶対領域<sup>Aフィールド</sup>。耐物理攻撃特化型なので、魔法に対しては効果が薄い。それから、俺ではレアアイテムを大量に身につけていても、一回張るので精一杯だ。一定のダメージを受けると消滅します。まあ、RPGじゃ、ありがちな魔法だね。

「くっそおー！」

ねえさんが吼えた。

魔法が、赤い閃光が、ほとばしっていたものが、細くなって、やがて途切れ途切れとなり、ついに消えた。

しかしその時には、船は俺たちの頭上を越えて、草原の向こうの森林へと突っ込んでいった。

衝撃波が俺たちの周囲五メートルの円形領域を回避して流れていく。

「削りきれなかった！」

いや地団駄踏むのはおかしいでしょ。

墜落してるのわかってんなら、助けてやってよ。

そして大地震と衝撃の波が、木々を巻き上げ大地を吹きさらして襲ってきた。

まるで土砂の津波だな……。

……魔法が持っても、俺たち、生き埋めになるんじゃない？

時間をかけると足したい設定が増える病気。

大地にバリアが溝を穿つ。

掘り起こされた土砂が割れ、飛沫となって、高く散る。  
バリアというボードに乗って、船は大地をサーフする。

「くああああああ！」

レイドが咆える。

ざっと五キロは溝を掘って進み、ようやく機体は静止した。  
バリアを消し、重力制御によって、ゆっくりと艦の底部を接地させる。

ただし、重力制御は解かないままだ。もしも重力圏下で制御を解けば、船は自重で潰れてしまう。

うまく彫り込んだ溝の形と、艦の底の形とが一致していて、船は傾くことなく、落ち着いた。

ふうっと、レイドは息を吐いた。

ジェルに気泡が混ざる。そのジェルが排出されていく。

「状況報告」

シルフィードが事務的に報告する。

「ダメージコントロールを最優先に設定。生命維持装置には問題なし」

「飛べるか？」

「無理ね。向こう一年は修理に費やしたいところよ」

彼はため息をこぼしつつ、背中を深くシートに預けた。

「そうか……まあ、帰る方向もわからないしな」

「バカンスに向いてるかどうかは、わからないけど……」

レイドは、外の景色をコクピットに映した。

「野生的な世界だな」

「バリア突破時に、軌道上にシーカーを配置しておいたんですけど、見ます？」

「なにかあるのか？」

「見ればわかるとしか……」

「……映してくれ」

そして彼は啞然とした。

「なんだこの世界は……」

そこには、剣を持って、竜と戦う者たちがあった。

竜はシルフィードよりも巨大で、人などその爪の先ほどの大きさでしかないのだが、彼らは魔法と畏と、そして刃によって、竜を巧みに追い詰めて行く。

あるいは、魔法が小さな鬼たちをなぎ払っていた。

イボだらけの、緑色の肌をした、子供ほどの大きさの鬼たちが、堆積した埃に足跡を残しながら、廃墟の中を駆け巡る。

手には粗末な槍やこん棒を持ち、土を固めて作られた、四角い家屋の合間や、時には中を駆け抜けて、逃げ惑うものたちを攪乱している。

建物は、宗教が生まれるような文明レベルの生活圏で、よく発見されるような家屋だった。

海を渡る船が、触手のようなものに引きずり込まれていく。

巨大なガレオン船が、中央部をまたいだ触手に二つに折られ、悲鳴をあげながら沈没していく。

そして、百万人規模の街があつた。街は堅牢な城壁によって守られており、中央には城があり、そのベランダには、見目麗しい少女がいた。

そんなわけがないのに、彼は、彼女と目が合ったように思えてしまった。

「なにか？」

「なんでもない」

答えながらも、レイドは、意地の悪いやつだと、内心で悪態をついた。

管理コンピュータであるシルフィードが、パイロットが注視しているものを、把握していないわけがないのだから。

「どういつ生態系の世界なんだと、思ってた……」

ありえない、というニュアンスが含まれている一言だった。

高空から捉えられた映像には、人だけではなく、たくさんの、動物や植物と混ざり合ったような容姿の者たちが、映し出されていた。

まるで進化論を否定している。

「おかしいだろ、これ……」

そうですね、と、シルフィードも同意する。

「見た目だけでなく、映像から判断できるだけでも、生物の筋力値が、ありえないものになっています。有機生命体としては異常ってレベルじゃないですね。パワードスーツを着てる人間よりも大きいかも……」

「マジでか……」

「全長十……十二？　メートルの竜のような生き物ですが……これも1G下で生存できる形態ではありませんね。自重で潰れない理由がわかりません」

ぼそりと、空を飛んでるのもいますし、と追加する。

「あの魔法っぽいのはなんだ？　特殊能力か？　ESPか？」

「不明ですが……が、大気に大量のウイルスを感知しました」

「なに？」

「ナノマシンの亜種のようなようです。大気中に酸素と同じ含有率で漂っています」

「それは、呼吸ができないだろ……」

「はい、ですから、この世界の人間は、強化人間であるか、代理人<sup>アバター</sup>体ではないかと」

そうかと、彼は考え込んだ。

アバターは、そう珍しいものではない。

量子通信の可能領域であれば、人はアバターを自分自身として行動させることができる。

これは危険な作業を代行させる以外に、遊興目的でも活用されているものであった。

この惑星で活動している人型知性体の正体がアバターであるのなら、これくらいの遊びは普通であろう。

「それが、あの不可思議な能力の原因か？」

「ナノマシンが事象を構築しているのでしょうか。演出として見せているのかも」

「だからって、対艦砲並みの魔法ってのは……」

「メインプログラムが消失して、リミッターが働いていないのかも  
しれません」

「暴走してるのか……」

「あるいは、管理者がいなくなってしまったために、拡張プログラムを止める者がいなくなってしまうって、走りすぎてしまったのか」

管理者がいなくなった……か、と、レイドは切なそうにこぼした。

「救難信号は、この星からのものだったんだよね……」

「……はい。いまは消失してますが、間違いありませんね。発信源はここです」

「内容の解析は？」

「助けてくれとしか……」

「想像することしかできないか」

「移民船であつたのか、商業目的の船だつたのか、娯楽使節団だつたのか……」

二人で考え込む。

「生きるために、惑星改造をやつたんだろうな……」

「ありえますね。船が**ぶつか**<sup>わたし</sup>つたのは、1G環境と有害な宇宙線の反射、吸収、それから大気の流れを防ぐ目的の、惑星規模の防護結界だつたでしょう」

「ウイルスは、<sup>テラフォーミング</sup>環境構築のためのものか」

「その後、この星に根付くために、擬似的な生態系を確保する必要に迫られて、大規模な舞台を設置。キャラクターを配置し、演目を開始。環境を整えさせて、その上位に位置する者として、生活し、滅んでいった……アバターやキャラクターは、活動させるためにか



なりのエネルギーが必要になりますから、供給の手間を省くために、ウイルスとして拡散したのかもしれない」

「子孫くらいなら残ってるかな……」

「そうであるのなら、リミッターも、もともと排除していたのかもしれないね。遊興目的ならユーザーの安全について配慮する必要があるけど、実際的に入り用であったのなら、かける必要がありませんから」

「それで、そいつらが、繁栄を続けて増えていったら……」

ビーツと、警告音が鳴った。

「なんだ？」

「人が近づいてきます、先ほどの攻撃を行った者たちです」

「無事だったのか……」

「らしいですね」

「呆れたな……。まさに人間じゃないよな、少なくとも生身の……」

どうしますか？ と尋ねられて、彼は迷った。

「文明レベルをどう見る？」

「おそらく、未開文明と大差ないかと。科学の発達は認められませんが」

この場合の科学とは、内燃機関、油圧、電子機器の存在であった。

「そいつらについては？」

「わかりません。プログラムに支配されている状態なのか、それとも自律行動しているのかは……」

「自律行動だと厄介だな……生きているのと変わらないから」

生まれ落ちた形が違っただけ、という話になってしまっからだ。

アバターやキャラクターの形状は、遺伝子に紛れ込ませたものが決定しているにしても、それ以外の部分では融通を利かされていて、彼らは子供を作ることすらできるのだ。

しかし、生まれ落ちた子供には、その父母となったオリジナルのように、管理者権限による強制が働かないという問題があった。

単純に、思考を焼き付けられたタンパク質の人形ではなく、意識を持って生まれ落ちることとなるからである。

「どう考えても、一世代目、二世代目って程度じゃないだろうし、程度を合わせる必要があるだろうな……」

「なら、シナリオD-12はいかがですか？ 知的レベルが未開文明と同等なら、神とか勇者には弱いかもしれません」

「そついうの、苦手なだけだなあ」

しかたないかと、彼はシートを倒した。

シートのヘッドレストが変形し、彼の後頭部と顔の上部を覆う。

腕と足も、変形したシートに固定された。

「体の安全は頼むぜ、相棒」

「はい。アバターを起動します。あなたは勇者。わたしは精霊で」

「了解だ」

チェニツクにマントという、旅装備にチェンジです。

ことらは肩の上です。後頭部に張り付かせてるのは、あの船のえぐった地面が、どれくらい熱を放っているから。

その溝の脇を、燃えようとする木々を鎮火しながら進んでる。

鎮火方法はねえさんの魔法だ。視界を奪うための魔法の1つで、天候操作、雨の魔法。

前にやってたらしい暗殺者のゲームにドはまりしたねえさんは、魔法について、暗殺者が行動するなら……という思考のくせから抜け出せず、補助的なものを多数編み出して隠していた。

隠していたのも……手の内を隠すのは当たり前だという話から。

ちなみに名前を見れば、なんのゲームだか……わかるよな。

ことらには、黄色いパーカー着せてます。フード付き。

雨靴か長靴も作るかな、今度。

「雨と熱で蒸気が凄いツスね」

「……この距離であの大きさでしょ。宇宙人なのかな。でかい船だ

わ  
」

電磁フィールドとかなんだろうが、雨が弾かれて、球状のドームが傘を作っているのがわかる。

「円盤じゃないんスねえ……」

「これ、イベントだと思う？」

「微妙」

ねえさんも、そうよねと顔をしかめた。  
運営ならこれくらいのことはいりそうだけど……。

うけ狙いでな！

でも俺には、地形が変わるってのが、引っかけた。  
こつまで地形に変更を加えてしまうと、拡張コンテンツの追加購入や、発生条件を満たしている人間、いない人間で、見える景色に差ができすぎてしまうからだ。

多人数参加型のゲームで、これはないと思えるんだ。

場所だって、そう高いレベルのキャラでなくても、遠征して来られる場所だし、船の大きさも、森の外からでも観測できるものだろう。

なら、これは、ゲームのクエストじゃなくて、この世界での、リアルな事件だって判断した方が、妥当なんじゃないだろうか。

「宇宙船が落ちてくるような世界だったとか……」

「ないわねー……」

剣と魔法じゃなかったのかよ。

「言葉、通じますかね？」

「システムが、通じるようならね」

「システムって、ログウィンドウのことですか？」

「うん、あれって、万能翻訳機みたいなものじゃないかな」

「俺たちと、この世界との仲立ちはしてくれてますけど……宇宙人さんにはどうなんだろ？」

「あたしは、この船の連中が、システムを管理してる奴なんじゃないかって、疑ってるんだけどね」

だっただらと思う。

「相手は、神様ツスか？」

近いだろうねと言うのが、ねえさんの見解だった。

メニューにシステム、それにクエスト。どこかにこれらのプログラムを走らせているシステムがあることは間違いないんだから。

「じゃあ、この世界って、宇宙人の箱庭だってことですか？」

「異世界じゃなくて、異星とか……」

「俺たち、転生じゃなくて、アブダクションされたとか!？」

「どうなんだろうねえ？」

「船の中からは、タコとかイカとか、そんなのが出て来るんですかねえ」

タコイカと聞いて、ことらんが体をゆすり始めた。

やめて！ けっこうぐらつくから！ わくわくしないで！

俺としては、グレイが良いかなあ。タコとイカは、ことらんが狩りそうだから。

…… 虎って、イカで腰抜かすのかな？

まあ世界の大半が、俺たちと同じ人間型なんだから、この船が無関係でないのなら、あんまり心配する必要はないんだろうけど。

そんなことを思いながら、俺たちは溝に下りて、船の後部、巨大なロケットノズルっぽいやつの下にまで、近づいていった。

三十歳だけどエロ担ですw

船は、自分で掘った溝に、木々を押し倒した形ではまっていた。  
見上げる。でかい。予想以上だ。

「グレートドラゴン 閻竜よりは……小さいですかね？」

「ホワイトドラゴン どうだろ？ 白竜くらいじゃない？」

……下手なビルより高いよな、これ。

学校の校舎よりでかいか？

とにかくでかくて、見通しの良いところからみないと、よくわからないな。

近くまで寄る。船自体の熱はあっても、延焼するほどの強さはなく、落ち着いていた。

ねえさんの魔法のおかげだろうけど。

溝はぬかるみ始めていた。というか、雨水が流れ込んできて、川のようになり始めている。

ねえさんが雨の魔法を消す。

すぐに雨雲が消え、もとの晴れやかな青空が戻った。

俺たちは溝を上がって、今度は船首へと向かってみた。

「鬼が出るか、蛇が出るか……」

くっ！ 言ってみたい台詞を取られた！  
なに横目に、にやりとか！ くやしい！  
とかやっている、船に急激な変化が訪れた。

船体から、光の粒子が立ち上った。

それらは徐々に数を増して、密度を濃くし、人の形を取り始めた。船首から後頭部を起こすように、仰向けになっていく、巨大な女性像の像を象っていた。

落ちていた髪が、ばさりと振られて、背に落ち、胸に流れた。

こちらを見た……と思った次の瞬間、それは消失し、俺たちの前に、一人の男が立っていた。

男は白い胴甲冑を身に着けていた。

タワーシールドと、長剣を身に帯びている。

二十歳代だろうか？ 後半っぽい。

うーわーと、俺とねえさんはなんとも言えない顔つきになってた。おーおー！ と、ひとりことらん、大はしゃぎ。

ばこんばこん痛いから！ にくきゅうハンドで叩かないで！ あたま痛いから！

男は顔を上げると。

「やあ」

……と、人なつっこそうな笑みを見せた。

彼はきよろきよるとすると、自分の背後へと問いかけた。

「ここが新たな世界なのか？」

「はい、勇者様」



その右後ろに、さっきの巨大な女性が、人と同じ大きさになってたたずんでいた。

つま先が地面に着いてない。  
浮いていた。

その人は光を纏っていた。  
白く透けた肌を持ち、光の粒子を乱舞させ、絹の衣を纏っていた。  
ちっ、さっき素っ裸だったのに、なんで服を着てるんだよ……。  
ついでに衣が透けてるんだが…… なんか見えてるのは肌色じゃない、  
その向こう側にある宇宙船の外装だ。

ねえさんの眩きが耳に入った。

(テンプレ女神 k t k r)

俺としては精霊様を押ししたい。

……と、そんなことを思っているとは考えてもいないんだろう。  
勇者と女神様は、台本でもあるみたいな会話を続けてる。

「く……くくく」

「ね、ねえさん？」

なんか三文芝居がツボに入りましたかね？  
ひっじょーに嫌な予感に襲われた。

「あなたが……その、勇者様、なの？」

男はねえさんの問いに答えた……。

「俺は、役割を持って誘<sup>いよ</sup>われたものです。この白のゆりかごに」

「ほー、へー？」

「？……信じられないかもしれません。だけど、俺はこの世界の人間じゃない。もしよければ……」

ねえさんは顔を伏せ、髪で顔を隠し……なんか震えてるんですけど？

「ああ、もう、フラグ……あたし、限界だわ」

「……あいさー」

「ねえ、勇者様……」

じりじりと下がる俺。

「なんですか？」

「証明……してくれます？」

「なにを……！？」

ねえさんが、ロープから右腕だけを突き出し、無詠唱でビームを放った。

自称勇者が身を横にして、間一髪で避ける。だがおしい！それは対象を指定して放つ魔法だ。

当たって初めて発動するという系統の魔法は、避けたところでプ

ロセスが完了されていないため、実行は当たるまで継続される。  
当たるまで追いかけるそれは、自動追従型と言える魔法だった。

「くっ！」

勇者は盾で魔法を受けた。

勇者の姿を覆うように、歪みが見えた。

「バリア！？」

構えられた盾の前に、ビームは幾つにも別れて散らされた。

「なら！」

今度は雷撃を放つ。

「無駄だ！」

これもまた、電はスパークしながら、歪みの前に拡散させられた。  
間近くに居たためか、女の人が一瞬ぶれて見えた。  
そのぶれかた……映像の上に走ったような楕形は……。

「ノイズ？」

俺がいちいち驚いていると、勇者が慌てて待ったをかけた。

「待ってくれ！ 争うつもりはないんだ！」

勇者、必死だな。

「俺たちは敵じゃない！　だが、問答無用となれば、相手をせざるを得なくなる！」

「上等！」

「なんだと！？」

ねえさんが飛翔魔法で飛び上がる。

なんだあれ……このゲーム、マジで空飛べたんか……。

黒のマントを巻き付けて空を飛ぶねえさんに、勇者たちが動揺を見せる。

「ESPか！？」

「いえ、大気成分に混成しているナノマシンが、重力制御場を形成しています」

「重力制御！？　ナノマシンが？　ウイルスじゃなかったのか？」

「そうでもあり、そうでもない、ということのようです。彼らの肉体は、その作りの異常性から、多量のカロリーを必要としているようです。ナノマシンはウイルスとして、人外の運動量に見合った高カロリー栄養素として消費される形の他、本来の、ナノマシンとしての役割、魔法のような非科学的な現象を演出するものとして、活動もしているようです」

「キャラクターの思考に、ナノマシンが反応し、現象として構築してみせているわけか」

「そうなりますね」

ねえさんが、やっぱり……と、くつくつと笑った。

「ダウトお！」

「は！？」

「なにが勇者じゃ！ 勇者とかゆりかごとかいう奴が、ナノマシンとかウイルスとか言うか！ そいつはどう見ても宇宙船だし！ あんたは大根役者で！ その女はホログラフでしょうが！ 本当にありがとうございます！」

ねえさんは頭の上に両腕を掲げた。

生まれた火の玉が、広げるのに合わせて、火球へと育っていく。勇者が焦って待ったをかけた。

「待てっ！？ 君は科学がわかるのか！」

掲げた火球を放り落とす。

「君たちはキャラクターやアクターではなく、プレイヤーなのか！？」

プレイヤーだと？

俺とねえさんは、同時に反応していた。

ねえさんには、その単語についても、報告していた。獣王が口走ったものとして。

だけど、ちーっと遅い。

実行後の魔法は消去できない。

やばいなー、あれ、レーザーと違って、火球だからなあ。  
落ちた後も燃え広がるんだよなあ。

雷撃の魔法は盾……風味のバリア発生装置だよな、あれ。あれで  
対処してたけど、あのバリア、全周囲から襲ってくる熱が相手でも  
身を守るのかな？

……無理っぽいな。

灼熱地獄に生身とか。あの人、死んだな。

なーむー（－人－）

安全圏から、お祈りしてみたら、ことらんも頭の上で、真似をし  
た。

なむなむw

「わたしが！」

女神様が炎の前に出て、両腕を広げた。  
なにかその周囲に……あれ、ウィンドウか？  
十以上のウィンドウが開かれ……って。

俺は目をまるくした。

「ウィンドウだって！？」

しかも、あれ、メニューとか、ステータス画面じゃない！  
コントロールパネルか！？

女神様が何かを実行し、両腕を前に出した。

両手を前に、魔力っぽいのが渦を巻いて放たれた。

火球が魔力にほどかれていく。

削るように、帯となって、端から消失していった。

分解された！？

その力は炎を消すだけにはとどまらず、余波が姉さんをへと襲いかかった。

ねえさんが体に巻き付けていたローブを巻き上げて、強制的に大きく広げた。

「きゃ！」

演技じゃない、それは中の人の声だった。

俺たちは真後ろからお尻を、正体不明の宇宙人共は……たぶん真っ正面から見上げる形で……。

……ねえさん、なんでまた素っ裸になってるんスか。

マントを巻き付けてたの、また裸になってたからなんですネ。

いたたまれない空気が流れてった……。

「なんでまた脱いでんだ、あんたは」

ねえさんが、きゅーっと赤くなっていく。

「ばかあ！？」

ちよっ！？　だめ！　それメテオストライク！？

俺の上に！

「ばかやろー！？」

なんでこっち来る！？

空間を裂いて現れる、直径十メートルほどの岩塊。  
ことらんと一緒に逃げ惑う。

くつと赤くなりながら、ねえさんは体をロープで隠した。

「あんたたち、一体、なんなの！」

いや良いから！　今は良いから！　かつこよく振り向いてなかったことにしないで！　顔真っ赤なままだし！　こっち助けて！

「擬体からのコントロール波を感知。ナノマシンの活性と、空間干渉を確認。彼女が使用しているものは、改造型のアバターです」

「あなたは、やっぱり、プレイヤー、人間なんだな！」

お前らもこっち見んかい！？

ゲームじゃねえんだよ！　突っ込みで隕石落としとかねーよ！  
リアル舐めんな！？

「あんたたちは、管理者なの？」



「君たちは、難破船の生き残りか、子孫なのか？」

「無視すんなやこらあ！？」

装備チェンジ。打者モード。

バットを構えて三人へ。

「ばかつ、やめなさい！」

気付いたねえさん。でも遅い。

このバットは、運営が、某虎印の球団が優勝した記念に作って配ったチートアイテムだ。

その身には、制作者がもらったというサインが、レンダリングされている。

地に伏せたことらんの頭上で、俺は隕石の真芯を捉えて打ち返してやった。

どんな魔法も、芯を食えば打ち返せるという……ただし、スキル補正は無し。

純粹に、使いこなしたかったら、生身でバット振ってこいという酷いものだった。

ちなみに制作者が、優勝ごとに配るといふフラグを立ててくれたためか、虎印さんの優勝は、どんどん遠くになって行ってるみたいで  
す（・・・）

ファーストコンタクトは誤解ではじまり対話に続くという感じ。

「だってしかたないじゃない。このローブ、生身との接触部分が多ければ多いほど、増幅効果上がるんだもん」

なん……だと？

驚愕するしかない事実だった。

「なにそのエロ装備」

かーんつと、持ってたカップ投げつけられて頭に当たった。

「エロ言っな！ 付加装備なんて、干渉を起こして、もっと下がるし……」

脱ぐしかないのよ！

言い切った。

言い切ったよこの人。

「漢だ、漢がいる……」

「どうよ！（涙」

「俺、一生着いて来ます！ ねえさん！」

感動にむせび泣いていると、レイドさんとシルフィードさんに呆

れられてしまった。

「なんてーか、お前ら、緊張感って知ってるか？」

「自分たちが、いま、どうなってるのか……全然興味がないんですね」

うん、いま、そういう話をしてました。

ちなみに、俺たちがくつろいでいるのは、野営キットの拡張品であるテーブルセットです。

まあキャンプ仕様の組み立て椅子に丸机だけど。

順番は、俺、シルフィードさん、レイドさん、ねえさんの順。こ  
とらんは俺の膝の上。

最初は、船の中へと案内されたんだけど、めまいと吐き気に耐えられなくなったんだ。

どうやら、この人たちの言ってたナノマシンが、艦の中にはないから、ということらしい。

一応ウイルス扱いなんで、船が自動的に除去しちゃってるんだってさ。

それは、俺たちが入り込んでしまっているゲームキャラ、アバター  
ーっていう擬体が活動するために必要なものなんで、栄養失調、貧血のような状態に陥ってしまったんだそうだ。

んで、しかたなく、船の外でくつろぐこととなりました。

……船のうえに乗っかってる隕石とか見えないんだからね！

「接触型の伝達フィルタとかスキンとか、そういったものか？」

「なんスか、それ？」

「戦闘服の裏生地スキンフィルタに使われてるやつだよ。レバーやスイッチを動かすより、直接的に神経系を走る電気信号を伝達した方が速いからな」

「……そこまで速度が必要になっても、動かしてるのは人間なんスか？」

「速度が上がっても、相手との距離が広がるだけなんだよな。ドッグファイトと言ったって、低速なものでも太陽系の内輪と外輪くらの距離で追いかけることをするんだ。後は、機械だとしてもアルゴリズムを解析されちまうからな。失敗する人間、あるいは思いがけない選択を取る生き物の方が良いってこともあるのさ」

想像してみよう。

零距离からの居合いで勝負！

そりゃ思考する暇もない……けど。

十分な距離からの果たし合い。

確かに、ちゃんと抜いて斬りつけるだけの余裕が生まれてる。

もっと広くなると、戦術とか戦略とかを練るだけの時間が持てる。距離が生んでくれる時間は確かにある……けど、それを行動速度が殺してしまうと……。

比率が一緒じゃね？

「あれ？ んじゃ、レイドさんが宇宙戦士だから、俺たちより神経伝達速度が速かったりとか、そういうチートは？」

「ねえよ」

ぱたぱたと手を振られた。

シルフィードさんが補足してくれる。

「有機物で構成されている人体には、越えられない壁があるんですよ」

この人、コンピューターだって話だけど。

「しつもん」

「はいフラグさん」

「外なのに、どうやって映像出してるんですか？」

ナノマシンって言われた。

便利だな！ ナノマシン！

なんでもありか！？ ナノマシン！

「量子通信機を使ったコントロール波が、この世界全体を統括維持しているようです。発信源はわかりませんが……わたしは、限定的にクラッキングして、ナノマシンをコントロールし、この幻影を作っているんです」

映像じゃなく、ナノマシンが薄い密度で連結しているらしい。

……ん？ てことはだ。

「もしかして、完全に実体化することもできます？」

「可能ですが……いまは無理ですね。システムの許容範囲を超える可能性がありますから」

許容と聞いて、俺は獣王のことを思い出した。

「システムに排除されるかもしれない？」

「よくわかりますね。そういうことです」

レイドさんが、そういう意味ではと、ねえさんのローブの裾をぺろつとめくった。

「これ、この世界的には、ロストテクノロジーの一種とか、そういう扱いになるのかな？」

どごとと、その両頬に左右からパンチがめり込んだ。

シルフィードさん！ 実体化してんじゃねえか！？

ぐらりと傾いで、ゆっくりとレイドさんが倒れていった。  
後頭部から。

ごちんと痛い音がして、ことらんがびくんと毛を逆立たせた。  
いかん、この人も突っ込みが攻撃系の人か！？

あちち……つと、レイドさんが復活する。

「はは……でもま、よかったよ」

「なんスか？」

「正直、石器文明どころか、知的生命体すらいらないような星かもし

れないって覚悟が、あつたからな」

俺は、最初に聞いた話を思い出した。

「……宇宙漂流ですか……大変でしたね」

女神さんが、自業自得ですつ、とプンスカとした。

「たかがドッグファイトに熱くなって、無限加速なんて行っからです」

「いいじゃないか。おかげでこういう面白い出会いがあつたんだし」

「飛ぶことができないわたし宇宙船の立場は？」

「飽きたら宇宙に出るさ。生身の方は凍結したんだし。遊んでからでも良いだろ」

凍結？

生身？

俺が引つかかっていると、ねえさんが先に尋ねてくれた。

「それ、どういふこと？」

「ん？」

「レイド、アバターに関するシステムのことですよ」

あと、ようやくで理解してくれた。

「<sup>アバター</sup>擬体っていうのは、人格憑依型として用意された擬体のことなんだけどな、自分の意識を写し込んで使うんだ」

「凍結っていうことは、その間、生身の体は、ちゃんと保管してないといけないってこと？」

「いや、そうでもない」

「え？」

「システムによってまちまちなんだ。人間ってのは、いろんな記憶領域があるんだけど、その内の自伝的記憶って言われる部分をメインにコピーが取られて、擬体に写し込まれる。つまり、移動じゃないんだよ」

「擬体は、持ち主の意識体のコピーによって支配され、行動します。その行動結果から作られた記憶を、元の人間に戻す形で、記憶の統合が行われるのが、一般的ですが……」

「つまり、コピーをバカンスに出して、本体は仕事をして、バカンスの記憶だけ受け取ったり、自分の体はドックに入れて、擬体でバカンスに出かけたりな。あるいは、今の俺みたいに、どれだけ、どれだけのことになるかわからないから、オリジナルは安全な場所に確保して置いて、アバターで外に出たりとか……そういうわけだ」

「すげー……」

なんじゃそりゃ。

「魂がどうか、そういうのはないんすね」



レイドさんが答えてくれようとしたけど、ねえさんの声がかぶっちゃった。

「じゃあ、あたしたちって……」

どうだろうなと、レイドさん。

「正直なところ、わからないな。君たちは記憶や意識だけが、そのアバターにコピーされてしまった存在なのか、あるいはまるごと写し込まれてしまっているのか……」

「まるごとってのはなんスか？」

「記憶ってのは電気信号だろう？ 信号なんだから丸ごと根こそぎってこともあるってこと」

うわお。

「んじゃ、あっちの俺、真っ白ってこと？」

「案外、普通に生きてるかもしれないぜ？ もしかすると、そのアバターを維持してた仮想人格が行っちゃってたりしてな」

「……それはそれでどうなんだろう？」

話していると、ふうっと、ねえさんの息が聞こえた。

「……まあ、いっか」

ねえさんなら、そう言うだろうなあって思ってた。

「別に、あっちに未練があるわけじゃないしね」

「そッスね」

あっさりしてるなあと、レイドさんとシルフィードさんは顔を見合わせた。

「そうなのか？」

「うん、まあ、ね」

それじゃわからんだろうけど……。

「俺もねえさんも、ドロップアウト組なんスよ」

俺たちは、これ以上を語るつもりはなかった。

それくらいには複雑な事情を抱えていたから。

AA入れたかったけど、表示狂いそうだし、やめときました…残念！

ねえさんは隣の部屋の住人だった。

いつも、amazon箱のお届け物が、俺の部屋、ねえさんの部屋という順序で届けられていて、その日だけ、間違って全部ねえさんの部屋に届けられてしまった。

……二件ともほぼ毎日荷物が届くとか、どんだけだ。

ある日、荷物がこねーなーと思っていたら、ぴんぽーんと。

出てみたら、小動物みたいに怯えた少女が立っていた。

誤配達に気付かずに、荷物を開けてしまったと。

まあ元々、間違えた配達員が悪いんだから、怒るつもりはなかったんだけど……。

その時、俺の部屋の中がちらっと見えただろう、ねえさんは、「うわぁ!？」っと、いきなり部屋に押し入ってきた。

「フィギュアだらけ!？ ポスターも！ 貼ってあるのコンビニ限定チラシ!？ あっ！ 抱き枕！ 魔法少女まか！ 十八禁使用って、シートもだ!」

やめて！ 見ないで！ いたいけな瞳をきらきらさせないで！

「あつ、もしかして……」

ばたばたとお風呂場へ。

「らめえ ええええええええええ！」

「えっちなお風呂ポスターがびっしり！ しかもアニメのばっかり！！」

ひ  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
!

「ここはパラダイスなの!？」

良いじゃないか！ 独りものの一人暮らしなんだから、給料なんて他に使い道がないんだから、良いじゃないか！

すみません、この状況を他の人に見られたら、俺きつと、通報されます。

お帰り頂く頃には、もう今のねえさんになってました。

怖かったです。

幼女がにやりと……。

そんな俺とねえさんの出会いでしたが、実はヘビーなご家庭に育っておられました。

「学校？ 行っていないよ？」

「なんで？」

「行きたくないから」

どうもご両親が他界したらしいです。

んで、引き取り手の叔父夫婦は、遺産やら保険金やらを着服と…

「テンプレすぎんだろ」

「それで、誰も信じられないって、施設に駆け込もうとしたら、一人暮らしして良いって言われたの」

言われたのじゃねーよ。

あんた絶対、脅したろ。

「今のところ、綱引き状態なの。たまに市の人が様子を見に来たりするから、部屋の中、あんまり凄いことにできないし」

GJ！ 市の職員さん！

あんたは、情操教育をわかってる！

「まあ時間の問題だけどねえ……そろそろ使い込みが遺産の三分の一くらいになりそうだから、頼めるところに頼んで……」

んで、まあ、偶然にも俺の両親兄弟が警察関係の人だったんで、<sup>って</sup>伝手があるみたいなんで、信頼できる人を紹介してもらいましてね……。

あんまり、実家には関わりたくなかったんだけどなあ……。

みんな警察関係で、俺だけ違うって言えば、大体わかってもらえる、そんな底の浅い家庭事情だ。

んでまあ、それからぐだぐだとありましてね、俺が面倒を見ることになりました。

家の連中に見れば、俺がまともな人間っぽいことをしようとしてるからって、手助けしてやろうと思ったんだろうけどさ……。

ちやうもん！　ねえさんに脅されたんだもん！

実際、ヒキニートのねえさんは、コンビニへの買い出し要員が手に入ったと……二十四時間こき使ってくれました（ＴハＴ）

……今では良い思い出……なわけねえよ！

はつと元の世界に戻ったら、シルフィードさんが俺の顔をじっと見ていた。

なんか痛ましそうに……いやそんな大した話でもないんだけどもさ。

ねえさんは、ねえさんでした……っただけのことです。

「未練はない……ですか」

シルフィードさんです。

まあ、そこだけ取れば、悲しいこと言ってるなあ……っただけになるのかもしれないけども……。

厄介ことや、面倒ごとから逃げ出したかっただけなんだよな。

んで、俺にとっても、きつとねえさんにとっても、今は夢が叶えられたに近い状態なんだよな。

だから。

「だから、耐えられたのかもしれないね」

それは、その通りかもしれないと、ちょっとだけしんみりとしてしまいました。

レイドさんも同意のようです。

「普通、ゲームの中に入り込んでしまったとか、異世界に落とされた、なんて状況になったら、パニックを起こすか、元の世界に戻ろうとするんだろうけどな」

ねえさんが肩をすくめた。

「まあ、実際、耐えられなかった連中もいたけどね」

「そうなのか？」

「ねえさん、それ、俺、初耳っスよ？」

呆れられてしまった。

「あんたは、気づかないで行っちゃったでしょうが。チュートリアルよ。ひどかったんだから」

あー……とか思っていると、いきなり爆弾投げつけられた。

「それで……君たちは夫婦なのか？」

ぶぼつと吹いた。

ふたりでいっぺんに。

「「ごじょうーだんを」「

「そ、そうなのか？」

いやほんと勘弁して？

なにその誤解。

シルフィードさんまで、お願いしますよ。

怖いわ！

俺たちが本気で言っているとわかって、レイドさんとシルフィードさんは、困惑顔になったのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5067y/>

---

異世界転生THE（駄）フラグ（仮題）

2011年11月30日10時49分発行